

图51 木製品(1)

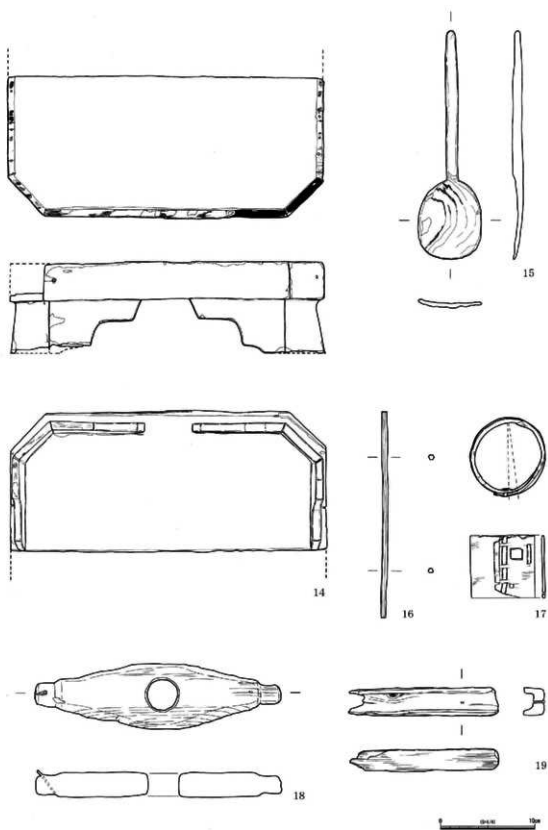


圖32 木製品(2)

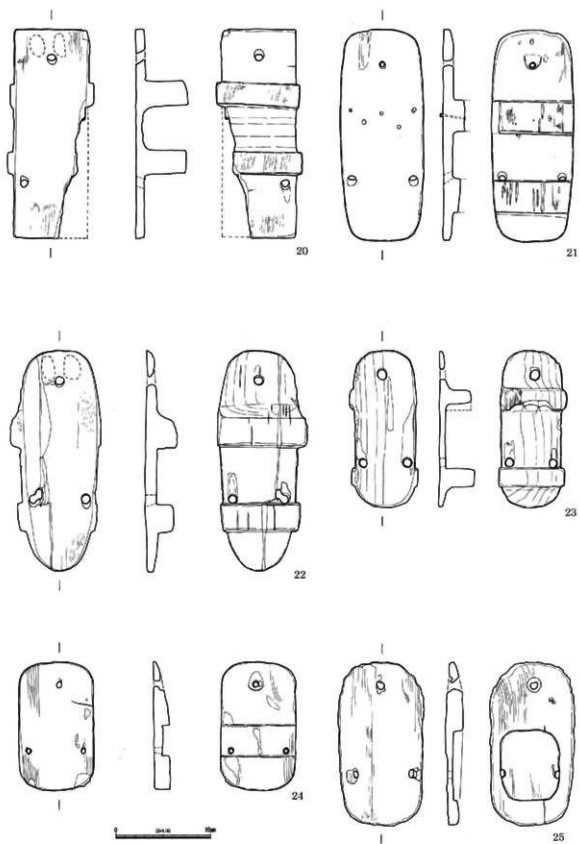


图53 木製品(3)

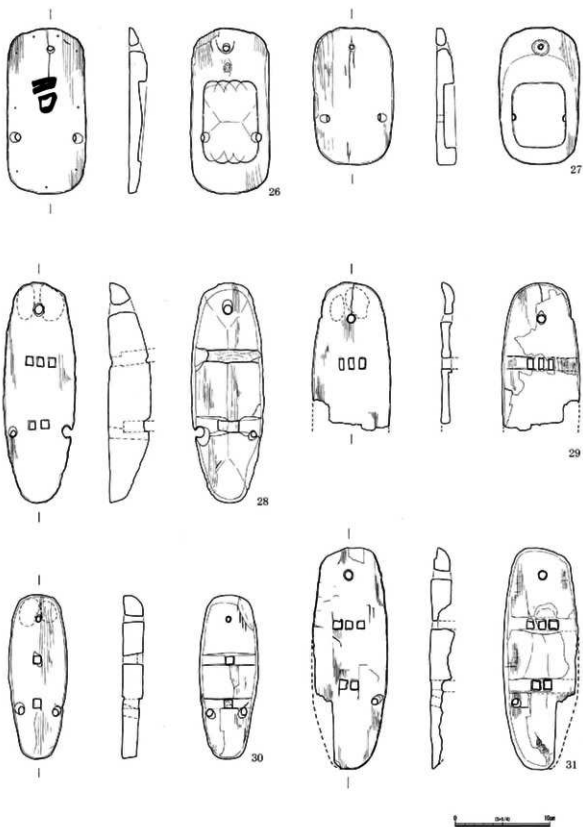


图54 木製品(4)

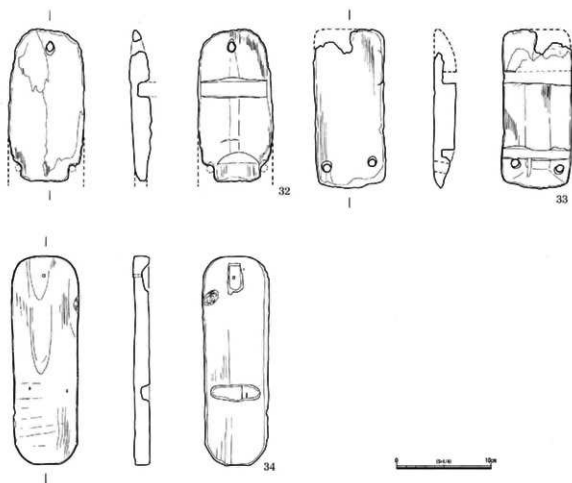


图55 木製品(5)

表21 木製品観察表

遺物番号	調査区	調査面	遺物名	種別	名称	計量 (cm)					備考	遺物番号
						a	b	c	d	e		
1	A-1	2	15(板蓋上段)	食器具	漆器碗	*11.3	*5.1	*4.9			口縁下に凸縁 内外面黒色漆	V-022
2	A-1	2	14(覆瓦)	食器具	漆器碗	*6.3	-	*6.9			内外面黒色漆 外面に文様あり	V-020
3	A-2	3	1-4(溝状遺構)	食器具	漆器碗	*11.2	*5.8	*6.3			内面赤色漆 外面黒色漆	V-013
4	A-2	3	2T(トレンチ)	食器具	漆器碗	*6.6	-	*5.3			内外面赤色漆 内面黒色物質付着	V-012
5	A-3	3	2(木組付)	食器具	漆器碗	-	-	*6.2			内面赤色漆 外面黒色漆 文様あり(意匠不明) 内面黒色物質残存	V-008
6	B-1	1	検出面	食器具	漆器碗	-	-	*5.6			内外面赤色漆	V-012
7	A-2	3	1-4(溝状遺構)	食器具	漆器碗蓋	8.6	4.3	*2.9			内面赤色漆 外面赤色漆 高台つまみ内一直線脚 文様あり(赤色漆+赤文?)	V-019
8	A-1	3	1(性格不明遺構)	食器具	漆器碗蓋	9.4	5.2	*1.7			内面赤色漆 外面黒色漆	V-008
9	A-1	3	1(性格不明遺構)	食器具	漆器碗蓋	*6.4	*4.0	2.2			外面文様あり(部色、意匠不明) 内面赤色漆 外面 黒色漆	V-005
10	B-2	3	検出面	食器具	漆器碗蓋	11.0	6.5	*3.1			内外面赤色漆 外面黒色漆 文様あり(赤色漆 草 化?)	V-105
11	A-2	3	1-4(溝状遺構)	容器	漆器蓋	12.8	1.0				上面赤色漆 下面黒色漆	V-006
12	A-2	3	検出面	容器	漆器蓋	*21.4	8.9				内面赤色漆	V-018
13	A-2	3	検出面	不明	漆器木製品	*21.8	*6.7	0.5			内面赤色漆 外面赤色漆 転用した痕跡あり	V-026
1	A-1	3	検出面	食器具	漆器箱	33.2	*33.2	9.6			1/2穴 内面赤色漆 外面黒色漆 補修痕あり	V-017
2	A-3	3	検出面	厨器具	杵子	24.2	4.7	1.1				V-018
3	A-3	3	1(石列)	食器具	箸	21.8	8.6	6.5			断面六角形	V-007
4	A-1	3	1(性格不明遺構)	厨器具	柄杓	*6.0	0.4	6.6			柄-底縁を欠く	V-012
5	A-2	3	2(土柱)	水遣	杵瓶	26.1	8.8	2.6	3.2		軸受け 両端貯残存	V-002
6	A-2	3	2(土柱)	燈籠?	不明木製品	18.9	2.0	2.2			釘跡あり 残の寸電性	V-074
1	A-1	2	検出面	雑物	下駄	22.1	*8.8	5.5	13.3	-	1穴順 溝面下駄 一部を欠く 表面のみ黒漆塗	V-007
2	A-2	1	割断Tr	雑物	下駄	22.5	8.8	2.3	12.4	6.5	1穴順 溝面下駄 丸釘使用	V-002
3	A-1	3	検出面	雑物	下駄	23.3	9.5	3.3	12.5	5.5	1穴順 溝面下駄	V-045
4	A-2	3	2(土柱)	雑物	下駄	16.6	6.4	3.8	8.4	4.7	1穴順 溝面下駄 前面に持ち 前後縁面に挟り 遺構残存	V-001
5	A-1	1	3(覆瓦)	雑物	下駄	13.6	7.0	1.7	7.0	5.7	溝2順 割り下駄 子供用か 溝残り一部残存	V-012
6	A-3	1	割断Tr	雑物	下駄	17.3	9.0	1.9	9.5	6.0	溝2順 割り下駄	V-007
1	A-3	1	埋溝-1	雑物	下駄	17.5	8.3	9.3	6.7	1.9	溝2順 割り下駄 釘孔あり 表面黒漆(文字不明)	V-014
2	B-1	3	検出面	雑物	下駄	14.5	8.4	2.0	7.5	6.6	溝2順 割り下駄	V-005
3	A-2	3	1-4(溝状遺構)	雑物	下駄	23.2	7.6	4.5	13.0	5.7	溝2順 溝面下駄 一部残存 表面黒色物質付 着	V-001
4	A-3	3	1(石列)	雑物	下駄	*13.2	8.2	-	-	-	溝2順? 割り下駄	V-066
5	A-1	3	1(性格不明遺構)	雑物	下駄	17.3	6.0	2.2	9.7	3.6	溝2順 溝面下駄 子供用か	V-007
6	A-1	2	2(埋溝)	雑物	下駄	23.4	7.8	2.5	13.5	-	溝2順 溝面下駄	V-106
1	A-1	2	2(性格不明遺構)	雑物	下駄	*26.0	8.0	*2.1	*12.9	*5.5	溝2順? 溝面下駄 後半部欠	V-021
2	B-1	3	検出面	雑物	下駄	16.7	4.5	2.3	*12.0	4.8	溝2順 溝面下駄	V-007
3	A-2	3	検出面	雑物	下駄	22.0	7.1	1.7	-	-	IV期 無釘下駄 後面に窪み	V-032

凡例

・計量(a~d)

測定:a:全体長 b:最大幅 c:最大厚or最大高

幅:e:口縁部幅 f:底脚幅(器台座) c:器高

器蓋:a:つまみ部長 b:口縁部径 c:器高

蓋:a:直径 b:最大厚

柄杓:a:最大長 b:最大高 c:最大厚

下駄:a:全体長 b:最大幅 c:最大高 d:前後差間 e:後左右差間

・*は残存値

・遺物番号:各調査区画中の遺物番号

・調査区:遺構番号

・写真図版:写真掲載図版番号

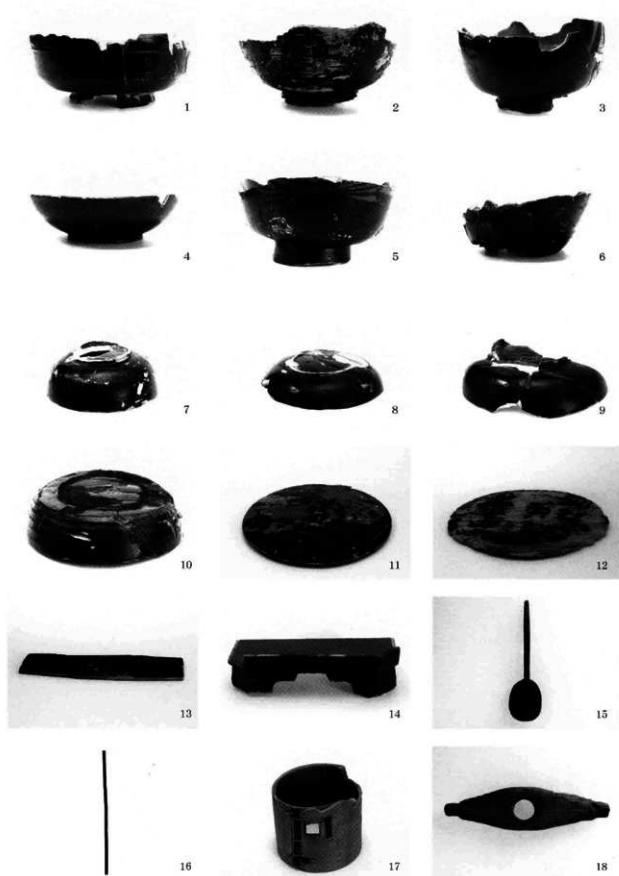


写真55 木製品(1)



19



20



21



22



23



24



25



26



27



28



29



30



31



32



33



34

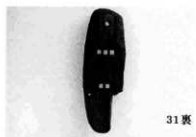
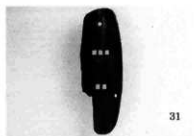
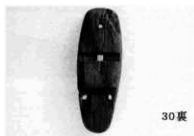


35



36

写真56 木製品(2)



(5) 石・その他製品 (図56・57、表22、写真58・59)

石・その他製品には石製品に加え、ガラス・樹脂・骨角・磁製・土製などの遺物を掲載した。これら遺物の種類は多岐に渡り、系統的に分類することは煩雑となるためあえて行わず、材質ごとに遺物の概略を述べることにする。

石製品

砥石、石臼、硯、碁石、石墨、不明石製品を掲載した。図56-1の硯は全長15.5cm、幅7.3cm、厚さ1.9cmを測る。灰白色を呈する泥岩を石材として用いており、表側は使用にともなう墨の沈着が認められる。砥石については3点を掲載した。全長図56-2は全長15.7cm、幅4.9cm、厚さ1.9cmを測る。側面には砥石成形時と思われる櫛目状工具(タガネか)痕が見られる。図56-4の石臼は粉礫臼の上臼である。全体の3分の1が残存している。図57-11はφ25cm程の自然石の中央を穿っており、内面には鑿とみられる工具痕が残る。未製品とも考えられるが、用途については判然としない。碁石は4点が出土した。白色石は二次被熱を受けているとみられ、赤化している。

磁製・土製品

ここでは陶磁器とは別に人形などの遺物を掲載した。図57-13は磁製の賽子である。一辺1.5cmの立方体で、形押し成形されている。無釉であるが、目の部分のみ焼成後に彩色している。江戸期の遺物ではなく、明治以降の時期に属すると考えられる。人形類は2点が出土した。いずれも第I遺構面の石組溝からの出土であるが、製作年代には開きがある。図57-15は磁製の人形の脚部であり、賽子同様に焼成後に彩色している。軍人をかたどったものと見られ、明治中期以降のものであると推定される。図57-16は土製人形の頭部であり、形押し成形による。燈茶褐色の胎土で、雲母片を多く含む。形態から江戸時代に属する資料と見られる。製作地については胎土の特徴から在地産とは考え難い。江戸在地産と推定される。

ガラス製品

第I遺構面から主に出土した。そのほとんどがガラス製瓶であり、石炭殻廃棄土坑や塵芥溜めと考えられる土坑から出土した。その中から目薬瓶、製糸関連製品、用途不明ガラス瓶の3点を図化した。図57-21は筭である。下半を欠く。色調は黄褐色であるが、二次被熱を受けているため黒化している。

骨角製品

簪、櫛、不明骨角製品が出土した。図57-22の簪は籠甲製で、全長14.9cmを測る。頭部はスズランの文様が施され、それぞれの花の中心には浅い円形の凹みが認められる。装飾が取り付けられていたと推測される。図57-23は籠甲製の櫛で、幅8.2cmを測る。図57-24は骨角製品である。全長9.1cm、幅1.1cm、高さ0.8cmを測り、頭部と見られる側は穿孔されている。先端部を欠くため、用途については不明であるが、歯ブラシなどの柄の可能性が考えられる。

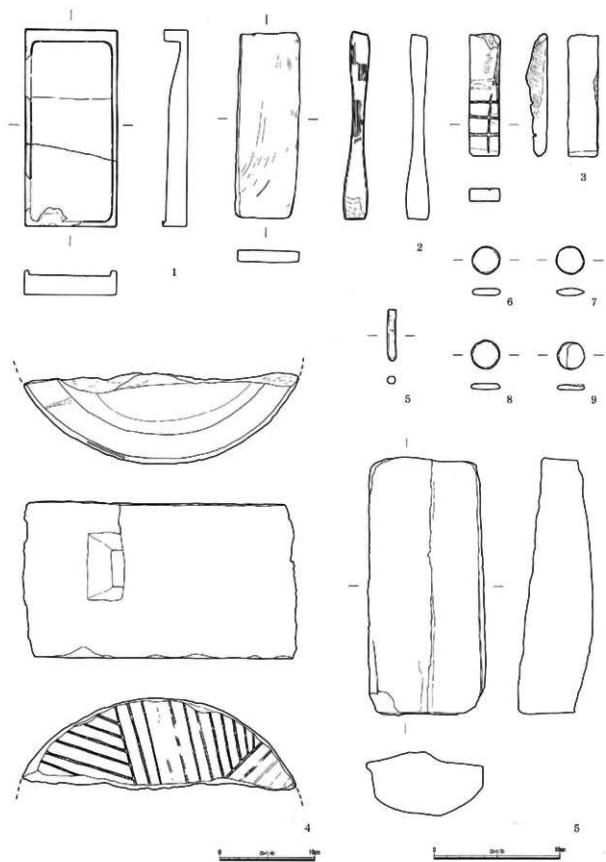


图56 石製品(1)

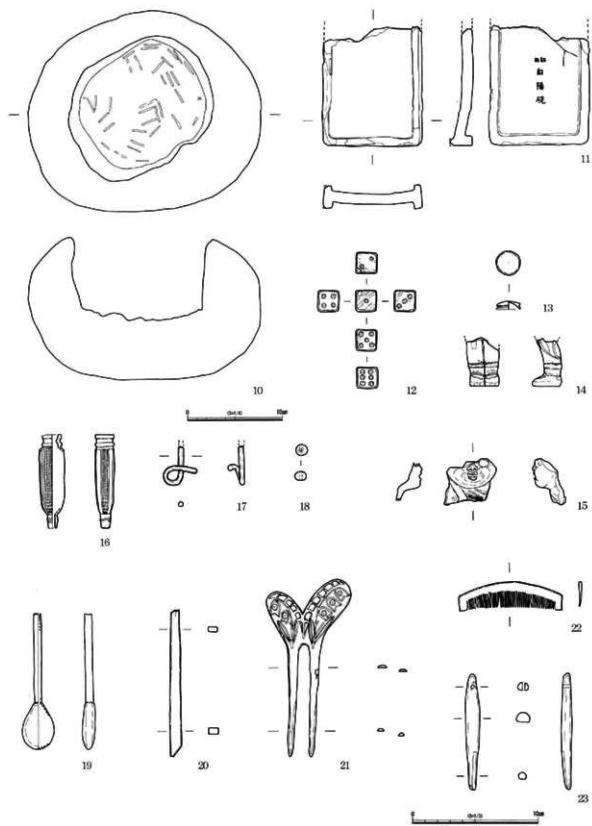


图57 石製品(2)

表22 石製品・その他遺物観察表

遺物 番号	調査区	検出層	遺物名	種別	名称	材質	法量 (mm)			重量 (g)	備考	遺物 取上番号
							a	b	c			
1	A-3	1	1(石組溝)	文房具	硯	瓦研?	15.5	7.3	1.9	300.3	白灰色	E-051
2	A-2	3	1-E(溝状遺構)	農工具	砥石	粘板岩?	15.7	4.9	1.9	210.9	磨目状工具痕	E-064
3	A-1	3	検出面	農工具	砥石	粘板岩?	9.7	2.3	1.7	56.7	溝状研痕	E-062
4	A-1	1	割溝T+	農工具	石臼	安山岩	φ26.7	16.4	-	5350.0	直徑測定元部D3.0cm	E-019
5	A-2	3	2(土坑)	農工具	砥石	泥炭岩	20.3	9.2	5.4	1585.0		E-066
6	A-2	2	3(石組溝)	文房具	石盤	滑石	φ4.1	0.7	0.6	3.2	灰褐色	E-061
7	B-2	2	10(溝様)	型玩具	基石	石製(白)	2.2	0.5	-	3.7	赤褐色 二次被熱痕	E-072
8	B-1	3	検出面	型玩具	基石	石製(黒)	2.2	0.6	-	3.5	黒色	E-074
9	B-2	3	検出面	型玩具	基石	石製(白)	2.3	0.5	-	3.3	赤褐色 二次被熱痕	E-075
10	B-2	3	検出面	型玩具	基石	石製(白)	2.2	0.4	-	2.5	灰褐色 二次被熱痕 一部欠	E-078
11	A-3	1	1(石組溝)	不明	不明石製品	安山岩?	φ4.6	15.1	-	4300.0	中央に円形の孔(貫通せず) 内面磨状工具痕跡を 見る	E-023
12	A-2	1	1(石組溝)	文房具	硯	磨岩?	φ6.4	8.9	1.9	121.0	背面文字「物許 朝陽庵」 合成樹脂製小	E-014
13	A-3	1	割溝T+	型玩具	基石	磁製	1.5	1.5	1.6	9.3	型押し成形 無釉 遠成産目を彩色	E-011
14	A-3	1	1(石組溝)	紡織	集積器(メド)	磁製	2.0	0.6	-	2.0	透明釉 型押し成形 中央に小孔	E-020
15	A-2	1	7(石組溝)	型玩具	磁製人形	磁製	φ3.8	φ2.6	φ2.4	16.1	無釉 遠成産青色 比類の脚部 近代～現代	E-080
16	A-2	1	7(石組溝)	型玩具	土製人形	土製	φ3.7	φ4.1	φ2.6	16.0	粗灰褐色 キラ磁釉 型押し成形	E-080
17	A-3	1	1(石組溝)	日用品	豆菰紙	磁子	7.4	2.0	1.5	12.4	青色 昭和期	E-020
18	A-3	1	割溝T+	紡織	製糸型連製品	磁子	φ2.2	2.7	0.4	1.9	青色 製糸工場型連遺物	E-009
19	A-2	2	3(石組溝)	日用品	玉	磁子	8.9	0.8	-	1.1	透明	E-000
20	A-2	1	3(石組溝)	不明	不明磁子製品	磁子	10.7	2.5	1.0	6.0	透明 灰黒釉	E-023
21	B-2	3	検出面	日用品	筆	磁子	φ11.8	0.9	0.6	15.7	黄褐色 二次被熱痕	E-076
22	A-1	1	割溝T+	日用品	押	磁子	14.9	6.6	0.3	6.1	赤褐色～黄褐色 裏面あり(文様スズラン)	E-006
23	A-2	1	4(磁瓦)	日用品	縁飾	磁子	8.2	2.0	0.3	2.5	赤褐色～非黄褐色	E-024
24	A-2	1	7(石組溝)	不明	不明骨角製品	鹿角?	9.1	1.1	0.8	8.6	頭部穿孔	E-025

凡例

・法量(a～c)

測定: a: 全体径 b: 最大幅 c: 最大Wor最大高

円形: a: 直径 b: 最大径or最大高

・*は残存数

・遺物番号: 各実施年度中の遺物番号

・調査区: 遺構確認区

・写真反映: 写真目録掲載番号

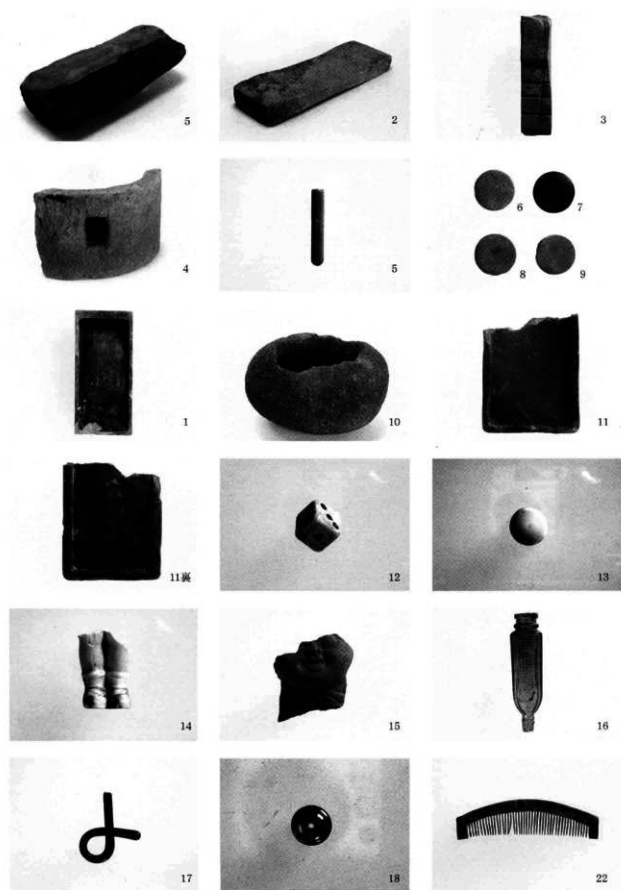


写真58 石・その他遺物



20



21



19



23

写真59 石・その他遺物

第IV章 関連調査成果

第1節 出土陶磁器の様相

考古学研究所 株式会社アルカ
西 本 正 憲

1：はじめに

平成16年度松代城下町跡（松代病院地点）発掘調査によって、主に江戸後期から昭和前期に至る遺構とそれに伴う陶磁器資料が出土した。本稿はこの松代城下町跡松代病院地点発掘調査出土陶磁器のなかから、遺構または検出面から出土した資料で、それらによって遺構または検出面の帰属年代が推定できる分析対象資料を選定した上、それぞれの出土遺構または検出面の時期と性格、特徴、割合などについて記したものである。

分析対象資料の選定については、発掘調査の実施および全体の整理に携わった長野市埋蔵文化財センターの宿野陸史氏、宮沢浩司氏に、後世の攪乱などが少ない地区や重要と考えられる遺構を挙げていただき、改めてそれらの出土遺物を筆者が確認をしていく形で行った。その結果、A区の1次面、2次面、3次面と、B区の一部については比較的面的な層序で遺構の確認と出土遺物を取り上げられていることが確認された。特にA区については遺構出土資料によって比較的详细な推定帰属時期を把握することができた。

次項では、概ね江戸時代後期に比定できるA区3次面、幕末～明治時代前期に比定できるA区2次面、明治時代中期から昭和前期に比定できるA区1次面の順に記述し、B区3～2次面についても補足として概略を記述することとする。

2-1：A区3次面出土陶磁器の様相

・A1区3次面1号遺構

遺構の性格は不明。A2区1号溝状遺構からA1区3次面2号溝状遺構とつながる痕跡がみられ、溝状遺構を水路と考えれば、方形の池状遺構であった可能性がある。

本遺構からは陶器・磁器・土器・焼締などの製品が2368.2g出土した。出土遺物全体を器種別、生産地別でみると、播鉢・鉢など日用雑器は肥前系陶器と瀬戸美濃系陶器が中心で、碗類は染付や色絵などの肥前系磁器、小杉碗（3個体確認）や色絵半球形碗などの京・信楽系陶器、灰釉の瀬戸美濃系陶器で占められる。皿類・瓶類は肥前系磁器のみが見られる。

19世紀以降から本格的に生産される瀬戸美濃系磁器が本遺構出土品に全く含まれないことから、本遺構は18世紀後半から18世紀末までには廃絶された遺構と推定される。

・A1区3次面2号遺構

前述したが、A1区3次面1号遺構とA2区1号溝状遺構をつないでいた痕跡が見られる遺構である。196.7gの陶磁器製品が出土した。いずれも小破片だが、A1区3次面1号遺構と同様、肥前系磁器、京・信楽系陶器・瀬戸美濃系陶器が見られる。廃絶時期もA1区3次面1号遺構と同様と見られる。

・A1区3次面検出面

A1区3次面の遺構外からも多数の陶磁器製品が面的に出土した。総重量は7561.7gにのぼり、遺物の残存率も比較的良好なものが見られる。

前述の遺構出土遺物と同様のものも多く確認されるが、新たな特徴として、19世紀以降の生産とされる瀬戸美濃系の染付磁器類が見られるようになる。また松代焼の初期段階と思われる土灰軸小鉢なども確認される。松代焼が本格的に生産を始めたのは、天王山窯と寺尾名雲窯が築かれた文化13年（1816年）とされていることから、本検出面はそれ以降になる可能性が高い。

肥前系磁器では碗形状が半筒形、半球形、端反形と多様になり、また新たな器種として段重が確認される。

明治時代前期の瀬戸美濃系酸化コバルト・酸化クロム絵付磁器破片もみられるが、総数70gと極わずかであることから、上面からの攪乱または混入によるものの可能性が高い。

以上の様相から、A1区3次面検出面出土遺物は、江戸時代後期文化・文政年間から幕末期にかけて、19世紀前半代の時期に帰属すると推定される。

・A2区3次面1号溝状遺構

およそ18mの長さにわたるA2区3次面1号溝状遺構からは、総重量4635.5gの陶磁器類が出土した。A2区3次面1号溝状遺構出土遺物はA、B、C、D、E、F地点の6地点に分けて取り上げられているが、遺構最北部F地点からは明治中期以降とみられる万古焼紫泥急須破片などが確認されていることから、本遺構の北方は上面から攪乱または混入した可能性がある。

本遺構出土遺物全体を生産地別にみると、肥前系陶磁器、瀬戸美濃系陶器、京・信楽系陶器が主な種類である。それぞれの生産地別編年においても概ね17世紀末から19世紀中葉の範囲に収まるものであり、A1区3次面1号、2号遺構と共通する。

ただ、A1区3次面1号・2号遺構と異なり、少数ではあるが19世紀初頭から幕末期までの瀬戸美濃系、関西系磁器が一定数確認されることから、遺構としては19世紀前半代まで後続する可能性が高いと推定される。

また、少量ではあるが、楽焼系製品、備前系製品、在地系土器が本遺構から確認されている。

・A2区3次面2号土坑

出土重量660gで、18世紀中葉から19世紀前葉の肥前系磁器が主体であるが、瀬戸美濃系陶磁器、関西系青磁、京・信楽系陶器、在地系土器を少数含む。遺構の帰属時期としては19世紀前半代に該当するものと思われる。

・A2区3次面3号土坑

出土重量288.5gで、18世紀中葉から19世紀前葉の肥前系磁器が主体。他に瀬戸美濃系陶磁器、京・信楽系陶器、在地系土器を含む。遺構の帰属時期としては19世紀前半代に該当するものと思われる。

・A2区3次面4号土坑

出土重量538.4gで、17世紀末から18世紀後半の肥前系磁器が主体。幕末期の特徴を有する物は見られない。他に瀬戸美濃系陶器、京・信楽系陶器、在地系土器を含む。播鉢などの日用雑器は本土坑からは検出されず、優品や嗜好品が多いのが特徴である。京・信楽系の色絵水注とその蓋破片が出土しており、いわゆる古清水焼と呼称される高級陶器製品と考えられる。瀬戸美濃系磁器が含まれないことから、遺構の帰属時期としては18世紀後半～18世紀末に該当するものと思われる。

・A2区3次面検出面

出土総重量9693.7g。肥前系陶磁器類が多く、磁器は碗、皿、鉢などの食器、陶器は播鉢が主な器種である。17世紀末～18世紀後半までの物が主体だが、19世紀に入るとと思われる端反形状の碗類も出土している。肥前系磁器は特に19世紀以前の伝世品が多いと推測され、中には17世紀前半の初期伊万里皿破片なども確認されている。

他に瀬戸美濃系陶磁器、京・信楽系陶器、松代焼も一定数出土しており、少数だが関西系陶磁器、北陸系（越前織田焼か越中舟見焼と思われるが判然としな）陶器、備前系焼締、常滑・万古系焼締（紫泥急須）などの生

産地陶磁器が認められる。

本検出面出土資料の中で、常滑・万古系紫泥急須破片と松代産の繰糸鍋破片は明治初期以降に帰属すると思われるが、A2区3次面出土遺物全体を概観すると、A1区3次面検出面と同様、19世紀前半に帰属するものと思われる。

・A3区3次面1号遺構（石列）

出土総重量1561.5g。肥前系陶磁器と瀬戸美濃系陶器で17世紀前半～17世紀後半に比定できる資料が比較的多く出土しており、各生産地編年で17世紀代に比定できる遺物が1016.4gと、本遺構出土の約2/3を占める。

一方で、明らかに江戸後期から幕末期に比定される肥前系陶磁器や関西系の磁器（青磁軸の型押陽刻皿で、三田焼と推定される）や陶器（白イッチンで文様が描かれる碗で、江戸後期～幕末期の丹波焼系と推定される）も見られる。また18世紀代に比定される肥前系磁器で、全面に被熱を受けた資料も出土している。

以上の出土陶磁器の様相をふまえ、本遺構の帰属時期を考慮すると、17世紀代に構築され、火災が多発した18世紀を過ぎ、19世紀前半期まで本遺構が残されていたと考えるのが妥当と思われる。

・A3区3次面3号遺構（土坑）

出土総重量363.7gで、そのほとんどが肥前系播鉢底部である。他に肥前系染付碗と京・信楽系色絵碗が数片のみである。出土量が少ない為遺構の帰属時期は難しいが、19世紀以降に生産が始まる遺物の出土が無いため、18世紀後半～18世紀末までの遺構と推定される。

・A3区3次面4号遺構（土坑）

出土総重量114.2gで、出土遺物も肥前系陶磁器破片が数点のみである。生産地編年では17世紀末から18世紀後半に該当するものであることから、本土坑も18世紀後半～末までの遺構と推定される。

・A3区3次面検出面

出土総重量5132.6g。肥前系陶磁器が最も多く、器種も多様である。ついで瀬戸美濃系陶磁器、松代系陶器、京・信楽系陶器が多い。瀬戸美濃系磁器も少数出土しており、幕末期くらいに比定できるものも存在するが、多くは合成コバルト染付製品や碇子など明治以降から昭和初期までの製品が含まれる。松代系陶器の個体数はさほど多くないが、播鉢や鉢、中型以上の瓶類など法量大きい器種で占められるので、重量的には比較的多い数値になっている。中でも松代焼でも初期の製品として、天王山窯製品と見られる鉄軸に土灰軸が掛けられる甕や、寺尾名雲窯または荒神町窯初期製品とみられる、灰軸に白泥を混ぜたような不安定な軸葉に銅緑軸が掛けられ、高台作りが薄い瓶などがある。京・信楽系陶器は小型の色絵半球碗が主で、他に瓶、蓋などが見られる。

他の生産地製品としては、北陸系（越前織田焼？）の底部に貝目・砂目跡がついた瓶の底部、在地系と思われるかわらけなどの土器製品が出土している。

A3区3次面検出面出土遺物を概観すると、瀬戸美濃系磁器の明治～昭和初期に帰属する資料以外は、概ね19世紀前半代に比定することができる。明治～昭和初期の瀬戸美濃系磁器はおそらく上層からの攪乱または混入であると考えられる。

2-2：A区2次面遺構出土陶磁器の様相

・A1区2次面2号遺構（方形遺構）

方形の性格不明遺構で、陶磁器・土器類が628.1g出土している。遺構の大きさに比して出土重量は少なく、内容は肥前系陶磁器破片が284.8gと全体の1/3以上を占める。中には19世紀以降に多く流通する、志田窯系の大皿破片も見られる。

他に瀬戸美濃系陶器、松代系陶器、在地系土器、備前系統焼製品が出土している。備前系は重量的には211.1gと全体の約1/3だが、大型の瓶の部分破片3点と残存率は高くない。

出土量が少ないため明確には言い難いが、明治初期に国内に流通する合成顔料などを使用した製品がないことから、概ね19世紀前半～中葉くらいまでの遺構と推察される。

・A1区2次面16号遺構（性格不明遺構）

遺構の性格は不明だが、出土陶磁器の総重量が2485.6gとやや多めである。肥前系陶磁器、瀬戸美濃系陶磁器、松代系陶器、関西系磁器がそれぞれ約550～600gと、ほぼ拮抗した割合を見せている。

器種の内容は主に碗、皿、段重、急須などの食器、鉢や播鉢などの日用雑器を中心に出土しているが、焼継直された祥瑞写しの染付茶入など茶道具に関連した遺物も確認される。また、合成コバルト顔料で絵付けされた製品が一定数認められ、摺繪印判製品が出土していないことから、本遺構出土陶磁器は、おそらく1890年代の明治時代前期までに廃棄された資料と推定される。

・A1区2次面28号遺構（土坑）

出土総重量2983.1g。出土総重量の約半分が在地系の半瓦質の火消壺・蓋である。全体的に雑器が多く見受けられる。他に肥前系陶磁器、瀬戸美濃系陶器、京・信楽系陶器、関西系青磁（三田焼皿か）などが見受けられる。出土陶磁器の様相としては、合成顔料などを使用した製品がないことから、概ね19世紀前半～中葉くらいまでに廃棄された遺物と推察される。

・A1区2次面35号遺構（土坑）

出土総重量347.9g。出土遺物の中で残存率が高く、かつ資料的な価値を持つ物として、東馬焼火用かんが挙げられる。東馬焼は現在の上田市で焼かれていた焼き物で、開窯時期が安政または万延年間から明治初期の約20年に限定される。

また、小破片ではあるがイギリス製と見られる銅版印判皿が見られる。表面は白色だが断面は陶質に近いややクリーム色を呈している。

他に松代系陶器、肥前系陶磁器、瀬戸美濃系陶磁器、京・信楽系陶器、関西系磁器、常滑・万古系統焼、などの破片が出土している。全体的に破損度が高く、全体形状を残しているのは前述した東馬焼火用かん程度である。

土坑の帰属時期を考慮すると、前述した東馬焼やイギリス製印判皿、さらに合成顔料で絵付けされた瀬戸美濃系磁器があり、かつ摺繪印判製品を含まないことから、総合的には明治時代前期までに廃棄された資料といえよう。

・A2区2次面1号遺構（建築基礎）

出土総重量4785.1g。内約半分が肥前系磁器で占められ、器種も多様である。焼継直しがされたものもある。瀬戸美濃系磁器も半球形・広東碗など江戸期の破片が見られるが、明治以降のクロム青磁轆面取碗や明治時代以降の通い徳利も出土している。他に肥前系陶器、瀬戸美濃系陶器、京・信楽系陶器、関西系磁器、松代系陶器、北陸系陶器、在地系土器などが見られる。また小破片だが、土器製で赤漆が塗られた水注の注口部が出土している。

遺構の帰属時期は、瀬戸美濃系染付磁器の存在から、19世紀中葉くらいと見られるが、1点クロム青磁小碗と通い徳利がみられることから、一部は明治時代以降に入る可能性もある。

・A2区2次面3号遺構（溝状遺構）

出土総重量2014g。瀬戸美濃系磁器512.4g、松代系陶器464.8g、肥前系磁器443.1gと、これら3種を中心に出土しており、特に瀬戸美濃系磁器は酸化コバルト・クロムなど合成顔料絵付、摺繪印判製品、クロム青磁製品など、

明治前期以降の生産品が多く確認される。ただし銅版印刷製品は本遺構から出土していないので、遺構の帰属時期は明治中期に限定できる可能性が高い。

肥前系磁器は18世紀後半～19世紀中葉までの、江戸時代後期から幕末までの製品が主である。他に京・信楽系陶器、関西系磁器、在地系土器などが出土している。

・A3区2次面15号遺構（木組土坑）

方形の板組遺構。出土総重量2651.6g。重量的には肥前系磁器が多く、928.1g出土している。江戸中期～幕末までの製品であり、肥前系磁器以外でも、瀬戸美濃系磁器が625.6g、関西系磁器が168.7gと比較的多く出土している。他に肥前系陶器、瀬戸美濃系陶器、松代系陶器、常滑・万古系焼締、A1区2次面35号土坑出土品と共通するイギリス製銅版印刷破片が出土している。

本遺構出土品の特徴として、煎茶用と思われる小碗が多数出土しており、ほぼ方形のもので7点、破片を含めると十数点はあるものと見られる。生産地は瀬戸美濃系呉須染付碗が多く、幕末から明治初期にかけて生産されたものと見られる。また同一文様の関西系コバルト染付碗が2点、江戸期の白磁小碗が1点認められる。

また、江戸前期の生産と見られる、肥前系陶胎染付の水指が、破片ながら口縁部から底部まで確認できる状態で出土している。形状は口縁部と底部が少しすぼんだ筒形状をしており、江戸初期から江戸前期にかけて珍重された、オランダ製のアルパレロという筒形容器を模したものとみられる。初期伊万里製品にこれを模した水指が現在まで伝世されている。本遺構出土品は、口縁内側には蓋受けが付けられており、文様は口縁部に帯状の唐草文が、胴部には牡丹、草花が丁寧に描かれている。

本遺構の帰属時期として、イギリス製銅版印刷破片がA1区2次面35号土坑と共通しており、コバルト染付製品があるものの、摺絵印刷製品を含まないことから、明治時代前期までに廃絶された遺構と推定される。

・A3区2次面第4トレンチ

出土遺物の中に17世紀後半から18世紀初頭に比定できる貴重な資料があったので、簡単に記したい。

肥前系の小型深皿が出土しているが、見込みにも4弁花文が描かれる。通常よく見られる5弁花文の原型とされしており、17世紀後半代に比定される。

もう1点は、表面が素焼き地に青色絵の盛り上げで唐草表現され、内面は白泥地に透明釉が掛けられる碗である。高台が欠損しているため銘などは確認できないが、その作風から17世紀後半の京都粟田口焼の陶家、帯山与兵衛作の可能性がある。

2-3 : A区1次面遺構出土陶磁器の様相

A区1次面からは、明治後期、大正時代から昭和30年代前後までに比定される陶磁器類が確認された。明治以降になると大窯業地でも、欧米系窯業技術の導入と地元での陶土や磁土の減少や枯渇、また、鉄道を始めとする交通網の発達により、生産地ごとの技術の画一化が進む。さらに地方民窯の廃窯が全国的に顕著になる。ちなみに松代焼の場合、旧松代町内では代官町窯が昭和8年に廃窯となるのが最後である。松代系の焼き物はその後現千曲市篠ノ井周辺の岡田諸窯によって継続されるが、これも昭和27年（1952年）に廃窯となる。

従って、この時期の出土破片資料を生産地別に区分するのは技術的に困難と言わざるを得ない。そのため、1次面出土陶磁器に関しては、大まかに陶器・磁器・焼締・土器と区分して重量計測し、生産地印銘や統制番号など生産地のはっきりと確認できる資料についてはその都度触れるようにする。また分析対象は比較的遺存状態の良い遺構出土陶磁器を中心にして記述する。

・A1区1次面1号遺構（石組遺構）

磁器1592.7g、陶器2156.7g、土器65.5g、焼締18.5g出土。出土磁器は江戸期伝世品から明治～大正期の摺絵印刷製品、太平洋戦争中の統制番号製品、太平洋戦争後のシルクプリント製品が含まれる。確認できる生産地は、磁器で有田（肥前含む）・九谷・美濃、陶器で瀬戸美濃・松代・益子、焼締で常滑・万古などがある。

2次面までには遺構は到達していないので、明治中期以降から昭和30年代前後にかけての時期の遺構と推定される。

・A2区1次面2号遺構（石組池）

磁器2694.0g、陶器3099g、土器673.7g、焼締186.6g出土。磁器は江戸時代の肥前系と明治中期～大正期の瀬戸美濃系がほとんどである。統制番号製品は見られない。高台内に九谷銘のある湯冷まし（煎茶用の道具）が1点のみ見られる。陶器も江戸中期から江戸後期・幕末にかけてのものが多く、特に江戸後期以降の京・信楽系が多い。松代焼は明治以降の大型品が多く、鉢や播鉢などの他に繰糸鍋、火鉢、朝顔形便器の破片などもみられる。肥前系、瀬戸美濃系陶器も出土している。土器は火消壺や甕の破片などで在地系と見られる。焼締は万古焼の紫泥急須で、「小嶋園」と印銘が付く。

古いものは江戸後期以降に比定される資料が多く、新しい物は統制番号製品がみられないことから、本遺構は江戸後期あるいは幕末期から、大正・昭和初期にかけての遺構と推定される。

・A2区1次面3号遺構（石組溝）

磁器181.3g、陶器250g、焼締19.6g出土。全体の出土量は少なく、遺存状態が良好なものも少ない。全体的にA2区①～2石組池と出土遺物の様相が共通しており、江戸後期あるいは幕末期から、大正・昭和初期に掛けての遺構と推定される。

・A2区1次面5号遺構（石組池）

磁器1040.0g、陶器3192g、焼締10g出土。出土遺物の様相はA2区①～2石組池、①～3石組溝と同様である。江戸後期あるいは幕末期から、大正・昭和初期にかけての遺構と推定される。

・A2区1次面6号遺構（石組溝）

磁器289.7g、陶器52.6g出土。出土遺物の様相は2号石組池状遺構、3号石組溝状遺構、5号石組池状遺構と同様だが、全体的に明治後期の銅版印刷製品から昭和初期と見られる磁器製おろし金・ガラス詰め込み蓋などや新しめのものが目立つ。

・A2区1次面7号遺構（石組溝）

磁器1361.5g、陶器945.5g、土器516.4g、焼締169.3g出土。磁器は江戸後期肥前系、明治～昭和初期瀬戸美濃系は中心。陶器も時期は同様で、瀬戸美濃系、京・信楽系、松代系が中心を占める。土器は瓦質の火消壺、焼締は常滑・万古製品の他に中世の珠洲系甕小破片が1点出ているが、明らかに後世の混入であろう。江戸後期あるいは幕末期から、大正・昭和初期にかけての遺構と推定される。

・A3区1次面1号遺構（石組溝）

石組溝裏込土出土資料と溝内出土資料とで、若干の年代幅の差が見られる。

石組溝裏込土出土品は大正時代製品の目安となる、多色銅版印刷染付磁器が出土していない。また上絵磁器碗の破片資料で日本地図が意匠されている資料があるが、樺太・千島列島が描かれているのに対し、朝鮮半島は描かれていない。これから推定すると、日露戦争後から日韓併合までの5年間、明治末期に本遺構が造成された可能性が高い。

他に江戸時代後期以降の肥前系陶磁器や瀬戸美濃系磁器なども含まれる。石組溝裏込土出土の類別総重量は、

磁器3417.1g、陶器1607.3g、土器35.3g、焼締73.1gである。

溝内出土資料は磁器9474.8g、陶器10708.7g、土器1772.5g、焼締402.2gである。江戸期のもも見られるが、おそらくある程度伝世されて、後代に廃棄されたものと想定される。新しいものでは、益子焼の山水土瓶破片、太平洋戦争中の統制番号製品、「六文銭」と文字と旗印が描かれた、土産物と思われる碗皿類、戦後のシルクプリント製品や吹米系磁器などが見られる。

以上の出土状況から、本遺構は明治末に造成され、昭和30年代前後に廃絶された遺構と推定される。

・A3区1次面3号遺構（石組溝）

磁器80.8g、陶器300.6g。磁器は瀬戸美濃系多色銅版印判碗と丸谷系絵碗の2点、陶器は松代焼の鉄軸甕破片である。磁器の特徴は大正時代製品であることから、本遺構もそのくらいの時期に帰属するものか。

2-4：B区出土陶磁器の様相

B区については、A区と比較して後世の擾乱が大きいとみられ、遺構、検出面ともに良好な出土の資料が少ない。そのため、中でも出土状態がいいと思われる地区・遺構又は検出面のみに触れることとする。

・B2区3次面1号遺構（溝状遺構）

出土総重量1445.5g。内1074.1gを松代焼の男性用小便器破片が占める。白化粧地に銅緑釉と灰釉が流し掛けられた製品で明治期のものと思われる。江戸期肥前系磁器、瀬戸美濃系陶器なども少数みられるが、太平洋戦争中の統制番号が入られた美濃製磁器碗なども出土しており、同2次面にも一部溝状遺構が重複しているので、一部は江戸期にも存在した可能性もあるが、明治以降に深く埋込まれた溝状遺構と考えられる。

・B2区3次面検出面

出土総重量は3865.5g。内1521.1gを江戸中期から幕末期までの肥前系磁器が占める。肥前系陶器も播鉢など日用雑器で790.2g出土しており、出土総重量の半数以上が肥前系陶磁器で占められている。また本検出面では、江戸期ガラス製品が出土している。徳利頭部の小破片だが、淡緑青色の鉛ガラスで一部銀化している。上絵金彩が施された跡があり、19世紀前半の江戸系ガラス製品と推定される。他に瀬戸美濃系陶磁器、松代系陶器、京・信楽系陶器、関西系磁器、備前系焼締、在地系土器などが出土している。

少数ではあるが明治以降の瀬戸美濃系磁器などがみとめられる。しかし3次検出面出土陶磁器の大部分は江戸期製品の範疇に収まる物であり、全体を概観した印象では19世紀前半の検出面と推定される。

・B1区2次面1号遺構（石組池）

石組裏込土や石組池底面から、瀬戸美濃系のコバルト染付製品など明治時代に比定される資料が出土しているので、遺構自体は明治時代に造成されたものと推定される。遺構内出土遺物は瀬戸美濃系陶磁器、肥前系陶磁器、松代系陶器、京・信楽系陶器、関西系磁器、備前系焼締、常滑・万古系焼締、在地系土器など。出土総重量4340.2g。

・B1区2次面2号遺構（石組溝）

出土総重量9530.4g。1号石組池と同様、石組裏込土や石組溝底面から、瀬戸美濃系のコバルト染付製品、万古焼紫泥急須など明治時代以降に比定される資料が出土しており、明治時代に造成されたものと推定される。遺構内出土遺物は瀬戸美濃系陶磁器、肥前系陶磁器、松代系陶器、京・信楽系陶器、関西系磁器、常滑・万古系焼締、在地系土器など。江戸期に比定される資料が主であるが、少量明治時代製品が確認されるので、江戸期品も伝世品の後代による廃棄であろう。ただし大正、昭和初期までに時代が下るものが見られないので、比較的短い期間の遺構かもしれない。

・B1区2次面検出面

出土総重量12005.8g。江戸後期から大正・昭和初期くらいまでの遺物が散見される。確認できるのは肥前系陶磁器、瀬戸美濃系陶磁器、松代系陶器、京・信楽系陶器、関西系磁器、常滑・万古系焼締、在地系土器などである。

3：各播風時期での生産地比率

以上、A区およびB区出土陶磁器の各遺構・各検出面の概要を記述した。本項では帰属時期が明らかになった遺構からの出土資料をさらに時期別で選定し、その生産地の比率を算出することとする。分析対象地区は検出面が良好に確認されたA区に限定する。

18世紀後半～末に比定される遺構として、A1区3次面1号・2号遺構（性格不明）、A3区3次面3号遺構（土坑）、A2区3次面4号遺構（土坑）の各遺構を選定した。これらの遺構の特徴としては、遺構出土遺物群の中に瀬戸美濃系磁器、松代焼系陶器が含まれないことである。

19世紀前半に比定される遺構として、A2区3次面1号遺構（溝状遺構）、2号、3号遺構（土坑）およびA3区3次面1号遺構（石列）（17世紀代から造成されていた可能性があるが、出土遺物の中心は18世紀後半から19世紀前半の物である）を選定した。この時期の特徴として、瀬戸美濃系磁器と三田焼に代表される関西系磁器の出現が挙げられる。

19世紀中葉に比定される検出面として、A区3次面（重機検出面を除く）を選定した。この時期の特徴として、文化13年（1817年）に開窯したとされる、松代焼製品の出現が挙げられる。

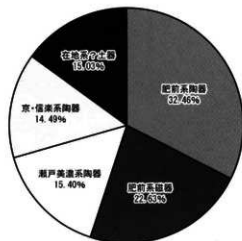
19世紀後半に比定される遺構として、A1区2次面2号遺構（溝状遺構）、A1区2次面16号遺構（性格不明）、A1区2次面28・35号遺構（土坑）、A3区2次面15号（木組土坑）を選定した。この時期の特徴として、明治時代になって欧米から導入された酸化コバルト・酸化クロムなど合成顔料による染付製品があげられる。ただし、明治15～16年（1882～1883）に導入された摺絵印判製品以降のものは含まない遺構に限定して選定した。

以上の4時期について、生産地の比率を算出することとする。なおそれ以降の生産地算出については、遺構または検出面自体が明治中期～昭和初期または昭和前期まで継続しているものがほとんどのため、今回は見送った。

・18世紀後半～18世紀末比定遺構 出土陶磁器生産地比率 総重量3548.3g

肥前系陶器33%、肥前系磁器23%、瀬戸美濃系陶器15%、京・信楽系陶器14%、在地系土器15%。

肥前系陶器が約3割の比率を示したが、これは播鉢など法量の多いものが主体であり、点数的には肥前系磁器が多い。肥前系磁器は碗皿類が主体で、染付の他に色絵、青磁製品などがある。瀬戸美濃系陶器は碗皿類が少なく、瓶や土鍋など播鉢以外の日用雑器が主体である。京・信楽系陶器は圧倒的に小碗類が主で、杉形の鉄絵碗と半球形の色絵碗が主体である。中には鎌子と思われる色絵の破片が出土している。当時の比較的高級な部類に入る陶器といえよう。在地系土器は焙烙などが主体である。



18世紀後半～18世紀末比定遺構
出土陶磁器生産地比率

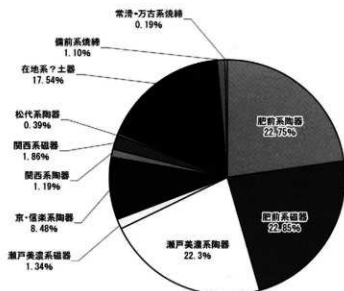
・19世紀前半期比定遺構 出土陶磁器生産地比率

肥前系陶器23%、肥前系磁器24%、瀬戸美濃系陶器22%、瀬戸美濃系磁器1%、京・信楽系陶器8%、関西系陶器1%、関西系磁器2%、備前系統焼1%、在地系?土器18%。

肥前系陶磁器の様相は前代に比べあまり変化がない。質が堅牢なため伝世される期間が長いのだろう。ただし広東形碗など新しい形状の碗が見られる。瀬戸美濃系陶器も同様だが、燈茶碗等、前代に見られなかった製品が確認されるようになり、また極少量であるが染付磁器が確認される。京・信楽系陶器は比率が少なくなるが、質的变化が見られず伝世されたものが多いと見られる。関西系陶磁器が新しい生産地として少量加わる。陶器は白化粧地に透明釉薬が掛けられるもの、白泥で筒描文様が

描かれるものが見られる。丹波系の江戸後期～幕末製品とみられる。磁器は染付と青磁があり、その質から三田焼または王地山焼と見られる。ただし、同様の手法を用いた窯は江戸後期以降の近畿地方で多数見られ、性格な生産地が不明なので関西系と一括した。備前系統焼は瓶破片のみの出土である。松代焼陶片と常滑・万古系陶片が1～2破片確認されているが、極少量のため本時期の帰属資料としては算出されなかった。

総重量7160.1g

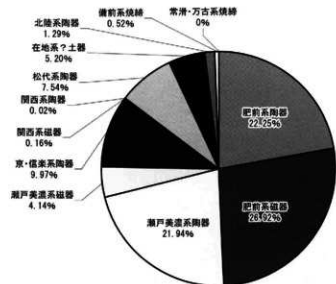


18世紀後半～18世紀末比定遺構 出土陶磁器生産地比率

・19世紀中葉期検出面 出土陶磁器生産地比率 総重量16604.6g

肥前系陶器22%、肥前系磁器27%、瀬戸美濃系陶器22%、瀬戸美濃系磁器4%、京・信楽系陶器10%、松代系陶器8%、北陸系陶器1%、備前系統焼1%、在地系?土器5%。

肥前系陶磁器の生産地比率は、18世紀後半から19世紀中葉にかけて全体の約1/2と一定した割合を保っていることがわかる。磁器の方がやや優位になり、端反形碗など当時期特有の形状をもつ器種が現れる。瀬戸美濃系陶器は前代と比率が変わらない。質的には日用雑器以外に、京焼風写しの碗や端反碗など、碗類の増加が見られる。磁器の比率は4%と若干増える。京・信楽系陶器は微量増加するが、前代までの伝世品と推定されるものの他に、上絵付けがやや粗略になる製品が増加するように感じられる。松代系陶器が新たに出現し、天王山窯製や寺尾名雲窯



18世紀後半～18世紀末比定遺構 出土陶磁器生産地比率

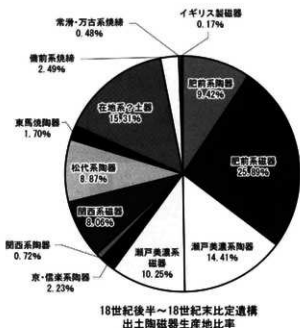
製などの初期松代焼と見られる瓶、鉢、甕、挿鉢などが見られる。北陸系陶器は甕破片、備前系統締は瓶破片で、それぞれ1%ずつ認められる。

生産地は多様化する傾向にあるが、根底にあるのは北前舟交易によってもたらされたと推定される製品が大勢を占め、ついで木曾街道経由で流入してくると考えられる瀬戸美濃系製品が全体の1/4～1/5ほど含まれるという共通した特徴が見える。

・19世紀後半期比定遺構 出土陶磁器生産地比率 総重量8463.3g

肥前系陶器9%、肥前系磁器27%、瀬戸美濃系陶器14%、瀬戸美濃系磁器10%、京・信楽系陶器2%、関西系陶器1%、関西系磁器8%、松代系陶器9%、東馬焼陶器2%、備前系統締2%、在地系?土器16%。

肥前系磁器が極端に減少する。また磁器も伝世品と思われるものがほとんどで、合成コバルトなどを使用した製品がほとんど見あたらない。瀬戸美濃系陶磁器は全体の約1/4で、その中で磁器の割合が10%と増加する。コバルト染付、クロム絵付製品など明治以降の製品が見られるようになる。京・信楽系陶器は2%と極端に減少し、変わって関西系陶磁器が陶器は1%、磁器が8%とやや多くなる。三田・王地山焼や清水焼などを含まれていると思われる。型皿、段重や水注など、型物や細工物が多い。松代系陶器は挿鉢や罌鉢などの日用雑器が多い。東馬焼陶器は火用かん1点のみの出土だが、完形資料のため全体の2%を示す。備前系統締は瓶破片で2%を示す。在地系と思われる土器が16%を示すが、これは煎茶の炉として使用する涼炉、炭を鎮火・保存するのに使用する火消壺がみられるため、やや大きな数値となった。また出土量が少ないため比率では0%となっているが、常滑・万古系急須とイギリス製銅版印刷皿破片が出土している。どちらも明治前期に比定されて差し支えないものである。



4：おわりに

2005年3月に長野市教育委員会から刊行された、長野市の埋蔵文化財第109集「松代城下町跡～中木町～西木町・紺屋町～」によって、城下町北国街道沿いにおける17世紀前半・17世紀後半・1717年推定焼土層・19世紀前半・1891年推定焼土層の存在が確認され、各層での推定生産地比率が示された。しかし18世紀代から19世紀中葉にかけては、後世の擾乱等によって明確な遺構検出面にともなう資料が少なく、今後の課題となっていた。

今回の発掘調査によって、先の発掘調査で不明確だった18世紀後半から19世紀後半までの出土陶磁器の様相が明らかになったといえよう。また、今回の発掘調査区は武家屋敷地であることが文献から推定されており、今後その器種組成などの研究などにも重要な意味をもってくるであろう。

なお、本稿では詳しくは触れなかったが、A区1次面については出土陶磁器の様相から概ね19世紀末期から20世紀中葉までの遺構であろう。明治中期以降から、大正・昭和前期までに続く比較的時間幅をもつと推察さ

れる。

最後に、本稿を執筆するに当たって、実際の発掘調査担当者であった、現長野市教育委員会文化財課の飯島哲也氏、文化財課埋蔵文化財センターの宿野陸史氏、同宮沢浩司氏に多くのご教示とご助言を賜った。ここに改めて諸氏に感謝の意を表したい。

引用・参考文献

- 長野県埴科郡松代町役場 1909 『松代町史』
- 長野市 2001 『長野市誌』第9巻 旧市町村史編 旧埴科郡・更級郡
- 長野市教育委員会 2005 『長野市の埋蔵文化財第109集 松代城下町跡～中木町～西木町～紺屋町～』
- 松本市教育委員会 2005 『松本市文化財調査報告 松本城下町跡宮村町第2次・天神西遺跡第2次』
- 新宿区内藤町遺跡調査会他 1992 『内藤町遺跡』
- 東京都新宿区立新宿歴史博物館 1993 『江戸のくらしー近世考古学の世界』特別展記念講演・座談会報告書
- 東京都埋蔵文化財センター 1997 『汐留遺跡1』東京都埋蔵文化財センター
- 愛知県陶磁資料館・瀬戸市歴史民俗資料館 2000 『カップ&ソーサーの世界』
- 瀬戸市教育委員会 1990 『尾呂』一愛知県瀬戸市定光寺カントリークラブ増設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
- 瀬戸市歴史民俗資料館 2002 『大正二年のせともの原』特別企画展図録
- (財)瀬戸市埋蔵文化財センター 2002 『江戸時代の瀬戸窯』企画展図録
- (財)瀬戸市埋蔵文化財センター 2003 『江戸時代の美濃窯』企画展図録
- (財)岐阜県陶磁資料館 2001 『戦時中の統制したやきもの』特別展図録
- 多治見市文化財保護センター研究紀要 1998 『市所蔵古陶磁図録Ⅰ』多治見市教育委員会
- 多治見市文化財保護センター研究紀要 1999 『市所蔵古陶磁図録Ⅱ』多治見市教育委員会
- 土岐市美濃陶磁歴史館 2004 『土岐市収蔵品図録Ⅱ-収蔵品にみる美濃窯の歴史』
- 土岐市 1997 『土岐市で作られた幕末・明治の染付』土岐市陶磁資料収集選定評価委員会 監修
- 上越市 2003 『上越市史叢書8 考古 一中・近世資料一』上越市史専門委員会考古学部会
- 山梨県教育委員会 1988 『銀沢河岸跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第148集
- 山梨県教育委員会 2004 『甲府城下町遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第215集
- 九州近世陶磁学会 2000 『九州陶磁の福年』九州近世陶磁学会10周年記念
- 九州近世陶磁学会 2001 『国内出土の肥前陶磁ー東日本の流通をさぐる』第11回九州近世陶磁学会資料
- 飯島哲也 2004 『発掘現場からみた松代城下町』真田宝物館主催シンポジウム「真田の城と城下」資料
- 井上喜久男 1992 『尾張陶磁』ニュー・サイエンス社
- 大橋康二 2004 『世界をリードした磁器窯 肥前窯』新泉社 シリーズ「遺跡を学ぶ」005
- 大橋康二 監修 2004 『初期伊万里図』NHKプロモーション
- 唐木田又三 1993 『信州 松代焼』信毎書籍出版センター
- 金田真一 1982 『国産茶碗のふる里を訪ねて』里文出版
- 古泉弘 2002 『地下からあらわれた江戸』教育出版 江戸東京ライブラリー19
- 塚隆 2004 『浅間山大焼』浅間園文ミュージアム
- 福田敏一 2004 『新橋駅発掘 考古学からみた近代』雄山閣
- 長谷部栄留・今井敦 1996 『日本出土の中国陶磁』平凡社版中国の陶磁12
- 西田宏子 1983 『萬古焼 根津美術館開催の「古萬古焼展」より』小さな書6月号 創樹社美術出版
- 沢田山治 1974 『日本のやきもの13 常滑』淡交社
- 林屋晴三 1992 『高麗茶碗 1～5巻』中央公論社
- 丸山日出夫 2004 『信州松代夢空間めぐり ぶらり城下・武家門』山本和男
- 信濃毎日新聞社 1977 『信州の焼き物』
- 根津美術館 2002 『知られざる唐津ー二彩・単色釉・三島手』展覧会カタログ
- 2000 『増補 やきもの辞典』平凡社
- 矢部長明ほか 2002 『角川日本陶磁大辞典』角川書店

第2節 出土木製品の樹種同定調査

(株) 吉田生物研究所

1. 試料

試料は長野市松代城下町跡から出土した服飾具13点、食事具1点、容器16点、用途不明品2点の合計32点である。

2. 観察方法

剃刀で木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

3. 結果

樹種同定結果（針葉樹5種、広葉樹7種）の表と顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

1) イヌガヤ科イヌガヤ属イヌガヤ (*Cephalotaxus harringtonia* K. Koch f. *drupacea* Kitamura)

(遺物 No. 17) (写真55-17)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は漸進的で、晩材の幅は非常に狭く、年輪界がやや不明瞭で均質な材である。樹脂細胞はほぼ平等に散在し数も多い。柾目では放射組織の分野壁孔はトウヒ型で1分野に1～2個ある。仮道管内部には螺旋肥厚が見られる。短冊形をした樹脂細胞が早材部、晩材部の別なく軸方向に連続（ストランド）して存在する。板目では放射組織はほぼ単列であった。イヌガヤは本州（岩手以南）、四国、九州に分布する。

2) マツ科モミ属 (*Abies* sp.)

(遺物 No. 15, 19, 33) (写真55-15, 写真56-19, 写真56-33)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は比較的緩やかで晩材部の幅は狭い。柾目では放射組織の上下縁辺部に不規則な形状の放射柔細胞がみられる。放射柔細胞の壁は厚く、数珠状末端壁になっている。放射組織の分野壁孔はスギ型で1分野に1～4個ある。板目では放射組織は単列であった。モミ属はトドマツ、モミ、シラベがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

3) マツ科トウヒ属 (*Picea* sp.)

(遺物 No. 29) (写真56-29)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材へ移行はやや急であった。垂直樹脂道は単独と2個接合がある。柾目では放射組織の放射柔細胞の分野壁孔はトウヒ型、まれにヒノキ型が2～6個ある。放射柔細胞の隔壁は数珠状である。放射仮道管には鋸歯状突起と有縁壁孔が見られる。板目では放射組織は1～20細胞高のものと、水平樹脂道を含んだ紡錘形のものがある。トウヒ属はトウヒ、ハリモミ、アカエゾマツ等があり、北海道、本州、四国、

九州に分布する。

4) スギ科スギ属スギ (*Cryptomeria japonica* D. Don)

(遺物No. 26, 27) (写真56-26, 27)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行はやや急であった。樹脂細胞は晩材部で接線方向に並んでいた。柾目では放射組織の分野壁孔は典型的なスギ型で1分野に1~3個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。樹脂細胞の末端壁はおおむね偏平である。スギは本州、四国、九州の主として太平洋側に分布する。

5) ヒノキ科アスナロ属 (*Thuopsis* sp.)

(遺物No. 11~14, 18, 21, 24, 25, 28(台), 30(台), 31(台))

(写真55-11~14, 18, 写真56-21, 24, 25, 28, 写真57-30, 31)

木口では仮道管を持ち、早材から晩材への移行は緩やかであった。樹脂細胞は晩材部に散在または接線配列である。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型からやヤスギ型で1分野に2~4個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。アスナロ属にはアスナロ (ヒバ、アテ) とヒノキアスナロ (ヒバ) があるが顕微鏡下では識別困難である。アスナロ属は本州、四国、九州に分布する。

6) カバノキ科ハンノキ属ヤシャブシ (*Alnus firma* Sieb. et Zucc.)

(遺物No. 6) (写真55-6)

散孔材である。木口では中庸の道管 (~80 μ m) が2~5個放射方向に複合して分布している。軸方向柔細胞は不顕著である。柾目では道管は階段穿孔と側壁に交互壁を有する。放射組織は平伏細胞からなり同性である。道管放射組織間壁孔は小型である。板目では放射組織は単列、高さ~600 μ mからなる。ヤシャブシは本州 (南部太平洋側)、四国、九州に分布する

7) ブナ科ブナ属 (*Fagus* sp.)

(遺物No. 2, 10, 22) (写真55-2, 10, 写真56-22)

散孔材である。木口ではやや小さい道管 (~110 μ m) がほぼ平等に散在する。年輪の内側から外側に向かって大きさおよび数の減少が見られる配列をする。放射組織には単列のもの、2~3列のもの、非常に列数の広いものがある。柾目では道管は単穿孔と階段穿孔を持ち、内部には充填物 (チロース) が見られる。放射組織は大体平伏細胞からなり同性である。道管放射組織間壁孔には大型のレンズ状の壁孔が存在する。板目では放射組織は単列、2~3列、広放射組織の3種類がある。広放射組織は肉眼でも1~3mmの高さを持った褐色の紡錘形の斑点としてはっきりと見られる。ブナ属はブナ、イヌブナがあり、北海道 (南部)、本州、四国、九州に分布する。

8) ブナ科コナラ属コナラ亜属コナラ節 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Prinus* sp.)

(遺物No. 31 (前A)) (写真57-31)

環孔材である。木口では大管 (~380 μ m) が年輪界にそって1~3列並んで孔圏部を形成している。孔圏外では急に大きさを減じ、薄壁で角張っている小管が単独あるいは2~3個複合して火炎状に配列している。放射組織は単列放射組織と非常に列数の広い放射組織がある。柾目では道管は単穿孔と対列壁孔を有する。放射組織は全て平伏細胞からなり同性である。道管放射組織間壁孔には大型の壁孔が存在する。板目では多数の単列放

射組織と肉眼でも見られる典型的な複合型の広放射組織が見られる。コナラ節にはコナラ、ミズナラ、カシワ等があり、北海道、本州、四国、九州に分布する。

9) ブナ科クリ属クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.)

(遺物No. 20, 23, 32) (写真56-20, 23, 写真57-32)

環孔材である。木口では円形ないし楕円形で単独の大道管(～500 μ m)が年輪にそって幅のかなり広い孔圍部を形成している。孔圍外は急に大きさを減じ薄壁で角張った小道管が単独あるいは2～3個集まって火炎状に配列している。柾目では道管は単穿孔と多数の有縁壁孔を有する。放射組織は大体において平伏細胞からなり同性である。板目では多数の単列放射組織が見られ、軸方向要素として道管、それを取り囲む短冊型柔細胞の連なり(ストランド)、軸方向要素の大部分を占める木繊維が見られる。クリは北海道(西南部)、本州、四国、九州に分布する。

10) ニレ科ケヤキ属ケヤキ (*Zelkova serrata* Makino)

(遺物No. 28(歯), 30(歯), 31(歯B)) (写真56-28, 写真57-30, 31)

環孔材である。木口ではおおむね円形で単独の大道管(～270 μ m)が1列で孔圍部を形成している。孔圍外では急に大きさを減じ、多角形の小道管が多数集まって円形、接線状あるいは斜線状の集団管孔を形成している。軸方向柔細胞は孔圍部では道管を鞘状に取り囲み、さらに接線方向に連続している(イニシアル柔組織)。放射組織は1～数列で多数の筋として見られる。柾目では大道管は単穿孔と側壁に交互壁孔を有する。小道管はさらに螺旋肥厚も持つ。放射組織は平伏細胞と上下縁辺の方形細胞からなり異性である。方形細胞はしばしば大型のものがある。板目では放射組織は少数の1～3列のものと大部分を占める6～7細胞列のほぼ大きさの様な紡錘形放射組織がある。紡錘形放射組織の上下端の細胞は、他の部分に比べ大型である。ケヤキは本州、四国、九州に分布する。

11) カツラ科カツラ属カツラ (*Cercidiphyllum japonica* Sieb. et Zucc.)

(遺物No. 1, 4) (写真55-1, 4)

散孔材である。木口ではやや小さい薄壁で角張っている道管(～100 μ m)がおおむね単独または2～3個不規則に接合して平等に分布する。道管の占有面積は大きい。放射組織は不顕著。柾目では道管は階段穿孔と側壁に階段壁孔を有する。放射組織は平伏、方形と直立細胞からなり異性である。道管放射組織間壁孔は対列状ないし階段状の壁孔がある。道管内腔には充填物(チロース)がある。板目では放射組織は方形ないし直立細胞からなる単列のものと、方形ないし直立細胞の単列部と平伏細胞の2列部からなるものがある。高さ～900 μ mからなる。カツラは北海道、本州、四国、九州に分布する。

12) トチノキ科トチノキ属トチノキ (*Aesculus turbinata* Blume)

(遺物No. 3, 5, 7～9) (写真55-3, 5, 7～9)

散孔材である。木口ではやや小さい道管(～80 μ m)が単独あるいは2～4個放射方向に接する複合管孔を構成する。道管の大きさ、分布数ともに年輪中央部で大きく年輪界近辺ではやや小さくなる傾向がある。軸方向柔細胞は1～3細胞の幅で年輪の一番外側(ターミナル状)に配列する。柾目では道管は単穿孔と側壁に交互壁孔、螺旋肥厚を有する。放射組織はすべて平伏細胞からなり同性である。道管放射組織間壁孔は六角形をした比較的

大きな壁孔が密に詰まって篩状になっている(上下縁辺の1~2列の柔細胞に限られる)。板目では放射組織は単列で大半が高さ~300 μ mとなっている。それらは比較的大きさが揃って階層状に規則正しく配列しており、肉眼では微細な縞模様(リップルマーク)として見られる。トチノキは北海道、本州、四国、九州に分布する。

◆参考文献◆

島地 謙・伊東隆夫 「日本の遺跡出土木製品総覧」 雄山閣出版(1988)

島地 謙・伊東隆夫 「図説木材組織」 地球社(1982)

伊東隆夫 「日本産広葉樹材の解剖学的記載I~V」 京都大学木質科学研究所(1969)

北村二郎・村田 源 「原色日本植物図鑑木本編I・II」 保育社(1979)

深澤和三 「樹体の解剖」 海青社(1997)

奈良国立文化財研究所 「奈良国立文化財研究所 史料第27冊 木器集成図録 近畿古代篇」(1985)

奈良国立文化財研究所 「奈良国立文化財研究所 史料第36冊 木器集成図録 近畿原始篇」(1993)

◆使用顕微鏡◆

N i k o n

MICROFLEX UFX-DX Type 115

長野市松代城下町跡出土木製品同定表

遺物番号	名 称	樹 種	遺物取 上番号
1	漆 器 椀	カツラ科カツラ属カツラ	W-022
2	漆 器 椀	ブナ科ブナ属	W-030
3	漆 器 椀	トチノキ科トチノキ属トチノキ	W-043
4	漆 器 椀	カツラ科カツラ属カツラ	W-052
5	漆 器 椀	トチノキ科トチノキ属トチノキ	W-068
6	漆 器 椀	カバノキ科カバノキ属ヤシャブシ	W-092
7	漆 器 椀 蓋	トチノキ科トチノキ属トチノキ	W-059
8	漆 器 蓋	トチノキ科トチノキ属トチノキ	W-088
9	漆 器 椀 蓋	トチノキ科トチノキ属トチノキ	W-085
10	漆 器 椀 蓋	ブナ科ブナ属	W-105
11	漆 塗 蓋	ヒノキ科アスナロ属	W-086
12	漆 塗 蓋	ヒノキ科アスナロ属	W-048
13	漆 塗 木 製 品	ヒノキ科アスナロ属	W-036
14	漆 塗 膳	ヒノキ科アスナロ属	W-037
15	杓 子	マツ科モミ属	W-058
17	柄 杓	イヌガヤ科イヌガヤ属イヌガヤ	W-072
18	釣 瓶	ヒノキ科アスナロ属	W-082
19	不明木製品	マツ科モミ属	W-074
20	下 駄	ブナ科クリ属クリ	W-057
21	下 駄	ヒノキ科アスナロ属	W-002B
22	下 駄	ブナ科ブナ属	W-045
23	下 駄	ブナ科クリ属クリ	W-081
24	下 駄	ヒノキ科アスナロ属	W-012
25	下 駄	ヒノキ科アスナロ属	W-007
26	下 駄	スギ科スギ属スギ	W-014
27	下 駄	スギ科スギ属スギ	W-095
28	下 駄 (台)	ヒノキ科アスナロ属	W-051
	〃 (歯)	ニレ科ケヤキ属ケヤキ	
29	下 駄	マツ科トウヒ属	W-066
30	下 駄 (台)	ヒノキ科アスナロ属	W-087
	〃 (歯)	ニレ科ケヤキ属ケヤキ	
31	下 駄 (台)	ヒノキ科アスナロ属	W-108
	〃 (歯 A)	ブナ科コナラ属コナラ亜属コナラ節	
	〃 (歯 B)	ニレ科ケヤキ属ケヤキ	
32	下 駄	ブナ科クリ属クリ	W-021
33	下 駄	マツ科モミ属	W-097

第3節 出土漆器の漆膜構造調査

(株) 吉田生物研究所

1. はじめに

長野市に所在する松代城下町跡から出土した漆器14点について、その製作技法を明らかにする目的で塗膜構造調査を行ったので、以下にその結果を報告する。

2. 調査資料

調査した資料は、下表に示す近世の漆器14点である。

遺物番号	器種	樹種	概 要	遺物取 上番号
1	漆器椀	カツラ	内外両面黒色	W-022
2	漆器椀	ブナ属	内面全面黒色・外面一部赤色の文様が残存	W-030
3	漆器椀	トチノキ	内面赤色・外面黒色	W-043
4	漆器椀	カツラ	内外両面赤色	W-052
5	漆器椀	トチノキ	内面赤色・外面黒色地に赤色で文様が描かれる	W-068
6	漆器椀	ヤシャブシ	内外両面黒色・高台を削り出さない	W-092
7	漆器椀蓋	トチノキ	内面赤色・外面黒色・外面黒色地に黒味がかつた茶色で葉文が描かれる	W-059
8	漆器椀蓋	トチノキ	内面赤色・外面黒色	W-088
9	漆器椀蓋	トチノキ	内面赤色・外面黒色地に黒褐色の漆で菊花文が描かれる	W-085
10	漆器椀蓋	ブナ属	内面黒色・外面黒色地に赤色漆と茶色漆で撫子文様が描かれる	W-105
11	漆塗蓋	アスナロ属	上面赤色・下面黒色	W-086
12	漆塗蓋	アスナロ属	全面黒色	W-048
13	漆塗木製品	アスナロ属	内面赤色・外面黒色・膳の一部	W-036
14	漆塗膳	アスナロ属	内面赤色・外面黒色	W-037
24	下駄	アスナロ属	ごく一部に赤色漆膜が残存	W-012

3. 調査方法

表1の資料本体の内外面から数mm四方の破片を採取してエポキシ樹脂に包埋し、塗膜断面の薄片プレパラートを作製した。これを落射光ならびに透過光の下で検鏡した。

4. 断面観察結果

塗膜断面の観察結果を下表に示す。

断面観察結果表

遺物番号	器種	部位	塗膜構造(下層から)				遺物取上番号
			下地		塗層構造	顔料	
			膠着剤	混和剤			
1	漆器椀	内面	柿渋	木炭粉	透明漆1層	—	W-022
		外面	柿渋	木炭粉	透明漆1層	—	
2	漆器椀	内面	柿渋	木炭粉	透明漆1層	—	W-030
		外面 (文様部)	柿渋	木炭粉	透明漆1層 赤色漆1層	ベンガラ	
3	漆器椀	内面	柿渋	木炭粉	赤色漆1層	ベンガラ	W-043
		外面	柿渋	木炭粉	透明漆1層	—	
4	漆器椀	内面	柿渋	木炭粉	赤色漆1層	ベンガラ	W-052
		外面	柿渋	木炭粉	赤色漆1層	ベンガラ	
5	漆器椀	内面	柿渋	木炭粉	赤色漆1層	ベンガラ	W-068
		外面 (文様部)	柿渋	木炭粉	透明漆1層 赤色漆1層	ベンガラ	
6	漆器椀	内面	柿渋	木炭粉	透明漆1層	—	W-092
		外面	柿渋	木炭粉	透明漆1層	—	
7	漆器椀蓋	内面	柿渋	木炭粉	赤色漆1層	ベンガラ	W-059
		外面	柿渋	木炭粉	透明漆1層	—	
8	漆器椀蓋	内面	柿渋	木炭粉	赤色漆1層	ベンガラ	W-088
		外面	柿渋	木炭粉	透明漆1層	—	
9	漆器椀蓋	内面	柿渋	木炭粉	赤色漆1層	ベンガラ	W-085
		外面 (文様部)	柿渋	木炭粉	赤色漆1層 透明漆1層 黄色漆1層	ベンガラ 石黄	
10	漆器椀蓋	内面	柿渋	木炭粉	透明漆1層	—	W-105
		外面 (赤色文様部)	柿渋	木炭粉	赤色漆1層 透明漆1層 赤色漆1層	ベンガラ 朱	
		外面 (茶色文様部)	柿渋	木炭粉	赤色漆1層 透明漆1層 黄色漆1層	ベンガラ 石黄	
11	漆器蓋	上面	漆	砥の粉	透明漆1層 赤色漆1層	ベンガラ	W-086
		下面	漆	砥の粉/墨	透明漆1層	—	
12	漆器蓋	上面	漆	砥の粉/墨	透明漆1層	—	W-048
		下面	漆	砥の粉/墨	透明漆1層	—	
13	漆塗木製品	内面	漆	墨/砥の粉	赤色漆1層	ベンガラ	W-036
		外面	漆	墨/砥の粉 墨/砥の粉 墨	透明漆1層	—	
14	漆塗膳	内面	漆	砥の粉	透明漆1層 赤色漆2層	2層に失 ベンガラ	W-037
		外面	漆	砥の粉/墨	透明漆1層/墨 透明漆1層/墨 透明漆	—	
24	下駄	上面	柿渋	木炭粉	赤色漆1層	ベンガラ	W-012

塗膜構造：下層から下地、漆層という構造をとる。

下地：漆に砥の粉を混和した漆下地（No.4,5,7,11）と、茶褐色の柿渋に木炭粉を混和した炭粉下地（No.1～3,6,8～10,12～15）の二種類の下地が確認された。漆下地が施された資料は、板物で樹種がアスナロ属であった。漆下地には、黒色の墨層を伴うものと伴わないものがある。

漆層：複数の漆層が重なるものと、単層のみのもののが認められた。漆下地の上の漆層は複数層重なる。また、文様部には2層の漆層がみられた。No.14外面には下地の直上に赤色漆1層が塗られ、その上に透明漆1層が塗られ、更にその上に文様部の赤色漆と黄色漆が重なっていた。下層の赤色漆よりもその上の透明漆の層厚の方が厚い。

顔料：赤色顔料と黄色顔料が確認された。赤色顔料としてはベンガラと朱（No.5,14）の二種類がみられた。黄色顔料としては石黄がみられた（No.14,15）。No.5内面には2層の赤色漆層が重なるが、その2層ともにベンガラと朱の二種類の赤色顔料が混和されている。No.14外面の下地直上の赤色漆層にはベンガラが混和されていたが、文様部には朱が混和されていた。

摘要

長野市松城城下町跡から出土したさまざまな器種の近世の漆器について塗膜構造調査を行った。

木胎、下地、漆層と重なる構造であった。

下地は漆に砥の粉を混和した漆下地と、柿渋に木炭粉を混和した炭粉下地の二種が認められた。漆下地の施された資料は木胎の樹種がアスナロ属の板物であった。また、漆下地には黒色の墨の層を伴うものと伴わないものがある。

漆層には、複数の漆層が重なるものと、単層のみのもののが認められた。漆下地の上には複数の漆層が重なる。複数の透明漆層が重なる場合、黒色の墨層がはさまれる場合もある。墨層の役割としては、透明漆層が透けて下層が見える、ということを防ぐことが考えられる。

顔料としては、漆に混和された赤色顔料と黄色顔料が認められた。赤色顔料ではベンガラと朱が、黄色顔料では石黄が使用されている。ベンガラの方はそれほど透明度は高くなく、朱の粒子は透明度が高い。朱の混和が確認された資料は数が少なく、文様部での1点と、髹の内面の赤色地色部分であった。このうち後者は、赤色漆層が2層重ねられているが、この2層ともにベンガラと朱が混合されている。黄色顔料の石黄は最上の文様部の層に認められた。

以上の内容と木胎の樹種をあわせてみる。5点の板物にはもっぱらアスナロ属が使用され、漆下地が施され、なかには数層の塗り重ねも確認された。椀、椀蓋の樹種については、トチノキ5点、カツラ2点、ブナ属2点、ヤシャブシ1点であった。これらには炭下地が施されており、ほとんどが1層の塗膜のみであった。

第V章 調査の成果と課題

第1節 調査の成果

今回の発掘調査では江戸後期から昭和初期にかけての遺構を調査し、大きく3期にわたる土地利用の変遷を跡付けることができた。江戸後期の遺構面では屋敷地境を示すと見られる溝を検出し、建物跡の可能性のある石列を確認することができた。幕末から明治中期にかけての遺構面では板組土坑を始め、多くの土坑を検出した。その多くは擾乱ともなうものではあったが、遺構密度などから建物範囲を推定するに至った。明治中期から昭和初期にかけての遺構面では石組溝と大小の石組池を検出した。時代は下るものの、泉水路との関連性も考えられることから重要な遺構といえる。出土遺物は陶磁器を中心に多様な遺物が出土した。なかでも幕末から明治中期の遺構面の板組土坑から出土した鉄製槍先、銅鏡を始めとする出土遺物は廃棄状況が他の遺構と大きく異なる点が特徴的である。また、江戸後期の遺構面からは京焼系の陶器碗が複数出土するなど、本調査地の性格付けにつながる成果を挙げることができた。

第2節 土地利用の変遷

本調査地における土地利用については既に第II章第2節においても触れているが、江戸時代にあつては武家屋敷地であり、城下町の中でも家格の高い武家が居住していた区域であった。図5の松代城下町の土地利用図は現在の地図に江戸時代後期の松代城下町の町並みを当てはめたものである。一般に江戸時代の絵図面を現在の土地区画に当てはめて比較・検証することは慎重に行う必要があるが、松代城下町に関しては江戸時代以降、現在に至るまでその町並みや街路に大規模な改変を加えられることがほとんどなかったため、絵図面と現代の土地区画との比較には大きな問題は生じなかった。江戸時代から現在までの調査地における土地利用の変遷について松代城下町を襲った大火や自然災害も含めてまとめたものが下表である。

江戸時代前期から中期にかけての土地利用については断片的な情報しか得られなかったが、真田信之が入封した1622(元和8)年の時点から調査地は武家屋敷として利用されていたことがうかがえる。この時期まで溯る遺構は今回の調査では発見されておらず、江戸時代後期遺構面より下層についてはグライ化が進行し、遺構面の把握は困難を極め、江戸時代前期から中期にかけての様相は不明であるが、今後、周辺地域での調査の進展ともなつて明らかになってくるものと思われる。

1750年以降、調査区A区およびB・C区と比定される位置に屋敷の所有者として記載される真田家、鎌原家については『真田家中明細書』(国立史料館編1986)および『真田一族と家臣団』(田中1979)などによれば、江戸時代末には家老を輩出する家柄であったことがうかがえる。以下にこれら文献に記載された真田家、鎌原家に関連する人物と関連する出来事を挙げる。

松代城下町跡（殿町）調査区における土地利用の変遷

	年 代		A 区	B・C 区
1	2005年～	平成17年～	長野松代総合病院 新病棟	
2	2004年	平成16年	更地（発掘調査実施）	
3	～2004年	～平成16年	松代病院駐車場・民家	八十二銀行松代支店
4	1955年代	昭和30年代	原松代製糸所	八十二銀行松代支店
5	1913年	大正2年	民 家 ？	六十三銀行松代支店
6	1870年	明治3年	午札騒動	
7	1868年	明治初年	真田翼	鎌原能太郎
8	1848～1853年	嘉永年間	真田志摩（板山？）	鎌原伊野右エ門
9	1844～1859年	弘化～安政	真田図書	鎌原司馬
10	1847年	弘化4年	善光寺大地震	
11	1826年	文政9年	真田図書	鎌原司馬
12	1800年	寛政12年	市場火事	
13	1788年	天明8年	河内屋火事	
14	1750年	寛延3年	真田図書	鎌原伊■■門
15	1742年	寛保2年	戌の大満水	
16	1733年	享保18年	荒町火事	
17	1717年	享保2年	湯本火事	
18	1622年	元和8年	侍 屋 敷	

真田 図書

- 1817年 文化14年 御家老職見習
 1818年 文化15年 江府御家老職
 1825年 文政8年 家督
 1826年 文政9年 依願御家老職御免
 1836年 天保7年 御家老職若殿様御傳兼
 1843年 天保14年 御傳御免、百石御加増、同心拾人増御預

真田 志摩（貫道、板山）

- 1820年 文政3年 真田図書（貫想）の子として誕生
 1847年 弘化4年 家督
 1851年 嘉永4年 家老職に就く。同年御勝手懸となり、藩財政をにやう。
 1853年 嘉永6年 政変により家老職を免ぜられる。
 1859年 安政6年 知行・差立席（家老職に就く家格を没収。隠居の上盤居
 1863年 文久3年 盤居を解かれ、家老職に復帰、御勝手懸に就く
 1864年 元治元年 御上京御供
 同 年 御預所懸
 1865年 慶応元年 以御感状御知行高式百石永被下

- 1868年 明治元年 明治維新にともない家老職を解かれ、執政となる
 1869年 明治2年 大参事となる
 1870年 明治3年 午札騒動（藩札騒動）の責任を問われ、大参事を解任、謹慎。
 1901年 明治34年 死去（82歳）

真田図書（翼）

- 1859年 安政6年 家督
 1861年 文久元年 無役席、且七百石高二御復
 1866年 慶応2年 御一字并嘉珍御長袴被下
 1869年 明治2年 改名（図書から翼）
 同 年 同心返上

鎌原 伊野右衛門

- 1838年 天保9年 初而御目見、藩主幸貫の一字を拝領し貫唯と改名
 1847年 弘化4年 家督。伊野右衛門と改名
 1851年 嘉永4年 家老職に就く
 1853年 嘉永6年 兵学指南御頼、御家老御免
 1854年 嘉永7年 御家老職、同年四月廿四日御役料百石
 1854年 嘉永7年 家老職退職
 1858年 安政5年 隠居するも、再勤。その後、政変により藩政から遠ざけられる。
 1863年 文久3年 塾居を解かれ、家老職復帰
 1866年 慶応2年 於江戸■懸懸
 1868年 慶応4年 御預所懸となる

以上の人物の内、真田志摩、鎌原伊野右衛門については家老として幕末期の松代藩で中心的な役割を果たしていたことがうかがえる。鎌原司馬、伊野右衛門の家系については1657（明暦3）年に現在の群馬県沼田から松代へ入部した2代藩主真田信政に従ってきた沼田衆の内の重臣、鎌原外記重俊を祖とする松代鎌原氏の流れであり、400石で鎌原司馬を名乗ったとされている。また、真田図書、志摩の家系については2代松代藩主真田信政の娘嶋照院が嫁ぎ先の土岐頼長が死去にともない松代に戻り、その後1665（元禄8）年に没した後にその名跡を鎌原外記重俊の三男右京重昌が真田図書と改めて



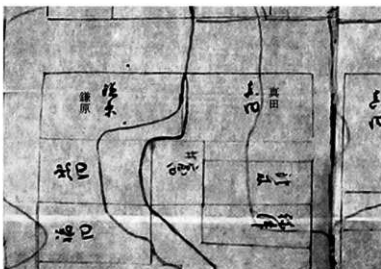
調査地周辺の絵図（『真田家文書』国文学資料館・国立資料館所蔵）

継いだことに始まるとされる。幕末期に家老を務めた真田志摩は5代目であった。ここから推察されることとしては真田家、鎌原家は屋敷地を隣接していただけでなく、そもそもは遠戚関係にあったことがある。

検出された遺構からはこうした関係までは抽出することはできなかったが、少なくともそれぞれの屋敷地の間には境となる溝があり、A・B区間における遺物間の接合関係は認められなかったことが指摘できる。このことからA・B区は別々の土地利用がなされていた空間であり、文献から比定される真田家・鎌原家の屋敷地である可能性を裏付けられるものと考えられる。

第3節 泉水路

松代城下町には全国的にも珍しい、多様な水系システムが現存している(長野市教委1982)。それは江戸時代から続く水路形態であり、屋敷の前および道路の中央を流れる「カワ」、屋敷地裏の境界線にある背割を流れる「セギ」、各庭園の泉水(池)と泉水を結ぶ「泉水路」に分類される。セギは、武家屋敷の菜園用水として利用され、泉水は観賞用の庭園として、また防火用水や生活用水として利用されたと考えられる。水路は現在も利用されており、住民の生活に潤いを与えている。



調査地周辺の水系図(『真田家文書』国文学資料館分館国立資料館所蔵)

調査では、第I遺構面で2つの石組池とこれに接続する石組溝を検出した。石組溝は真田家推定範囲の東端から北に向かって並んでおり、石組池を経由して隣接する鎌原家推定範囲内へとつながっている。石組溝および石組池の構築時期は明治中期頃と考えられるが、松代町に現在も残る泉水路はその都度補修、改変を繰り返しながら、受け継がれている。そのため、本調査地においても同様に水路を造り替える形で明治以降に構築されたものと推定される。19世紀前半頃の城下町の地割や水路を描いた史料として『真田家文書』(国文学資料館分館国立史料館所蔵:26Aさ1156)がある。絵図には、調査において確認された経路とほぼ同じ位置に流れる青い線が描かれており、これが調査で検出された水路の原形に該当するものと考えられる。平成15年に発掘調査を実施した八十二銀行地点においてもこの水路に連続すると考えられる石組溝が検出されており、松代城下町の失われた水路の様相が明らかになりつつある。

今回の調査によって検出された武家屋敷地の泉水と泉水をつなぐ水路の様相は、まさに「泉水路」の痕跡と考えられる。町屋敷である木町通り地点で確認された木樋による上水施設の存在に加え、武家地における泉水路の様相が明らかになったことにより、松代城下町全体において、複雑で多様な水利用施設が整備されていたことが推測される。

第4節 出土遺物とその特徴

今回の調査区は、松代城下町における武家屋敷地であったことが分かっている。平成13・14年度には、中木町・西木町・紺屋町といった町屋地区においても発掘調査を実施している（以下、「木町等調査」）。本節では、第Ⅲ章第2節にて報告した様々な出土遺物のうち、陶磁器における産地別組成を集成し、町屋地区の調査成果と比較検討を試みる。

中木町・西木町・紺屋町の発掘調査

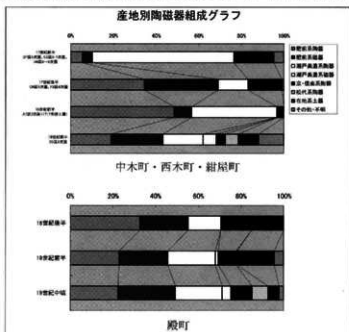
松代町の中木町・西木町・紺屋町の発掘調査は、平成13・14年度に緊急地方道路整備事業にもなつて実施した。当該地区は、国道403号線（旧北国脇往還）沿いの商業地域にあたる。発掘調査は国道の拡幅部分において行われ、建物区画の石列や焼土整地層3層、洪水堆積の痕跡と思われる砂礫層2層などを確認している。以下年代別に陶磁器の産地組成（重量比）を記述する。

17世紀前半には瀬戸美濃系陶器が7割近い組成を示し、17世紀前半の連房式登窯で生産された物が中心であった。17世紀後半には、瀬戸美濃系と肥前系の割合が逆転して、肥前系陶磁器が7割近い組成を示すようになる。18世紀前半の資料としては、享保2（1717）年の火災整地層と考えられる焼土層より、一括して遺物が出土している。陶器では重量比において瀬戸美濃系が肥前系とほぼ同量となり、器種や製品によって産地を選択していた状況がうかがわれる。また、19世紀前半になると、肥前系磁器が比較的多いものの、瀬戸美濃系の磁器や京・信楽系陶器、松代焼の鉢・すり鉢など生産地の多様化が進む。

今回の調査成果との比較

今回の調査では、18世紀後半の遺構より陶磁器が一括で出土している。重量比率は肥前系磁器が最も多く、次いで肥前系陶器、瀬戸美濃系陶器、京・信楽系陶器の順となっている。木町等調査では、18世紀後半の明瞭な資料が無いので、単純に比較することはできないが、18世紀前半の様相とは大きく異なっている。中木町等調査では磁器が少なく陶器が主体で、日用品類が多かったのに対し、今回の調査では、碗皿を主体として肥前系の磁器が多く、京・信楽系の高級な陶器も多数出土している。これは、町屋と武家屋敷において使用する陶磁器類が異なる可能性を示している。

一方、今回の調査成果は、中木町等調査の19世紀前半の様相とは類似している。中木町等調査の19世紀前半の遺物は資料が少ない上に、遺構が武家屋敷地であった可能性が高い地区にあたる。そのため、町屋の様相として一概に断定することはできない。今後は、調査を重ねて時代別および町屋・武家屋敷など土地の利用区ごとに出土遺物比較を行う必要がある。



第5節 今後の課題

松代城下町跡の発掘調査は、今回で3地点目にあたる。調査の積み重ねによって、少しずつ城下町の様相が判明しているが、いまだ不明な点も数多く残されている。

今回の調査では江戸時代中期以前の遺構を確認することができなかった。調査地は文献絵図資料によると、江戸時代当初から武家屋敷地として利用されていたことがうかがえる。中木町・西木町・紺屋町の調査では、16世紀後半の遺物も出土しており、城下町の当初の様相解明については、引き続き今後の課題として検証していくこととしたい。

また、今回の調査では武家屋敷地内の石組水路・石組池を検出している。松代の水路や池は、江戸時代から現代まで改修を重ねており、築造の時期・当初の姿などは明らかになっていないが、水源や経路など基本的な水路としての機能は大きく変化していないと考えられる。今後は、現在長野市教育委員会文化財課にて実施している水路調査の成果をふまえて、現存水路との比較や、築造時の姿などを検討していきたい。

今後の大きな課題としては、城下町全体の様相解明が残されている。これまでの発掘調査事例は殿町・木町など城下町跡の中央部にかたよっているため、それ以外の区域における考古学的様相は依然としてとらえていない。武家屋敷地の階級差による建物構造・生活スタイル等の違いや武家屋敷地・町屋・寺社区域との比較など、陶磁器の組成比以外にも、文献絵図資料や現存する建造物・庭園などを含めた多角的な検討が必要である。

松代には、史跡や歴史的建造物、伝統文化など数多くの歴史的遺産が残されている。今回の調査では、松代城下町の武家屋敷地の遺構が、まだ地中に残っていることが確認された。地上に現存する建物や地中に埋蔵されている遺跡は、どちらも往時の姿を物語る貴重な歴史的遺産である。今後は、松代の歴史的価値を身近で体感してもらえよう、発掘調査成果を広く周知していくことが求められる。

引用・参考文献

- 飯田市教育委員会 2001 『飯田城下町遺跡』
- 飯田市教育委員会 2002 a 『飯田山下情報センター敷地内遺跡』飯山市埋蔵文化財調査報告 第65集
- 飯田市教育委員会 2002 b 『長野県史跡飯田山城跡遺構確認調査報告』飯山市埋蔵文化財調査報告 第67集
- 江戸遺跡研究会編 2001 『図説 江戸考古学研究辞典』柏書房
- 江戸東京博物館編 1983 『江戸東京博物館総合案内』財団法人江戸東京歴史財団
- 大塚初重ほか 1994 『八百八町の考古学』シンポジウム江戸を語る 山川出版社
- 大橋康二編 1988 『肥前陶磁の変遷図』『別冊太陽 古伊万里』日本のこころ63 平凡社
- 大橋康二 1989 『肥前陶磁』考古学ライブラリー55 ニュー・サイエンス社
- 大橋康二 2000 『九州陶磁概論』『九州陶磁の福年』九州近世陶磁学会10周年記念 図録
- 大橋康二 1995 『建築史からみた発掘資料』『季刊考古学』第53号 特集「江戸時代の発掘と文化」雄山閣出版
- 北原糸子 1999 『江戸城外惣物語』ちくま新書209 筑摩書房
- 北村 保 1987 『松代藩士の見聞録にみる江戸後期の松代城下町』『松代』-真田の歴史と文化- 創刊号 真田宝物館
- 北村 保 1992 『近世松代火葬考』『松代』-真田の歴史と文化- 第5号 真田宝物館
- 北村 保 1993 『享保二年松代城類火焼失録』『松代』-真田の歴史と文化- 第6号 真田宝物館
- 古泉 弘 1983 『江戸を語る』-近世考古学への招待- 柏書房
- 古泉 弘 1985 『江戸の街の出土遺物 -その展望-』『季刊考古学』第13号 特集「江戸時代を語る」雄山閣出版

- 古泉 弘 1987 『江戸の考古学』考古学ライブラリー48 ニュー・サイエンス社
- 国立史料館編 1986 『真田家中明細書』財団法人東京大学出版会
- 斎藤 進 1997 「汐留遺跡における土施設について」『汐留遺跡1』東京都埋蔵文化財センター調査報告第37集
- 坂詰智美 1999 『江戸城下町における「水」支配』専修大学出版局
- 佐々木邦博・米林由美子・平岡直樹 2001 「城下町松代（殿町地区）において江戸時代に造られた泉水路の形成過程とその用途」『日本造園学会誌』VOL. 64 NO. 5 日本造園学会
- 佐々木邦博 2003 「松代城下町絵図に見られる水路について」『松代』第16号（2002年）松代藩文化施設管理事務所
- 佐々木達夫 1985 「物質の流れ - 江戸の陶磁器 -」『季刊考古学』第13号 特集「江戸時代を語る」雄山閣出版
- 寒川典昭・山下伊千造・南志郎 1992 「千曲川下流の歴史洪水の復元と考察」『土木史研究』第12号
- 信州大学工学部建築工学科松本研究室 1984 『長野市松代三町伝統環境保存計画策定調査報告書』
- 新宿区内藤町遺跡調査会ほか 1992 『内藤町遺跡』
- 竹内誠監修 2002 『ビジュアルガイド江戸時代館』全1巻 小学館
- 竹内増長 2000 「松本城下町における成立過程の様相」『信濃』第52巻第10号 通巻第600号 信濃史学会
- 田中誠三郎 1979 『真田一族と家臣団 - その系譜をさぐる -』信濃路
- 東京大学埋蔵文化財調査室 1998 『東京大学構内遺跡調査研究年報』2
- 東京都教育委員会 1991 『東京の遺跡展』- お江戸八百八町地下探険 - 図録
- 長野市教育委員会 1982 『庭園都市 松代』伝統的建造物群保存対策調査報告書
- 長野市教育委員会 1984 『調いのある庭園都市づくり』
- 長野市教育委員会 1993 『史跡 松代藩主真田家墓所』長野市の埋蔵文化財第50集
- 長浜文化財シンポジウム実行委員会 2000 『近世城下町の諸相』シンポジウム発表資料
- 日本貨幣商協同組合 2001 『日本貨幣カタログ』
- 林英夫・青木美智男編 2001 『事典 しらべる江戸時代』柏書房
- 降矢智男 2001 「甲信地方における肥前陶磁の出土状況について」『国内出土の肥前陶磁』第11回九州近世陶磁学会資料
- 堀越正雄 1995 『日本の上水』増補改訂 新人物往来社
- 本田博太郎 1970 『松代町の民家』長野県教育委員会
- 松代藩文化施設管理事務所 1999 『城下町松代』真田宝物館開館三〇周年記念 特別展図録
- 松本市 1989 『史跡松本城北外堀外側土塁発掘調査報告書』
- 松本市教育委員会 1989 a 『史跡松本城黒門橋形内発掘調査報告書』
- 松本市教育委員会 1989 b 『松本市城西西馬出遺跡緊急発掘調査報告書』松本市文化財調査報告書 No.79
- 松本市教育委員会 1996 『松本城下町跡 伊勢町一近世・町屋跡の発掘調査 -』松本市文化財調査報告書 No.122
- 松本市教育委員会 1997 『松本城下町跡 伊勢町第8・9・12次、本町第1・2次』- 平成8年度試掘調査報告書 - 松本市文化財調査報告書 No.129
- 松本市教育委員会 2000 『松本城下町 本町第5次、伊勢町第19・21・22次、中町第1・2次、宮村町第1次』- 平成10・11年度試掘調査報告書 - 松本市文化財調査報告書 No.149
- 松本市教育委員会 2001 『松本城下町 伊勢町第23・24・25次』- 平成12年度試掘調査報告書 - 松本市文化財調査報告書 No.154
- 丸山岩三 1980 「寛保2年の千曲川洪水に関する研究（1）～（4）」『水利科学』第34巻第1～4号
- 山田啓一・田辺淳 1985 「千曲川における寛保2年（1742）8月大洪水の考察」『第5回日本土木史研究発表会論文集』

報告書抄録

ふりがな	まつしろじょうかまちあと ～とのまち～						
書名	松代城下町跡(3)～殿町～						
副書名	長野松代総合病院診療棟・病棟増築工事にもなる埋蔵文化財発掘調査報告書						
シリーズ名	長野市の埋蔵文化財						
シリーズ番号	第114集						
編著者名	宮沢 浩司・飯島 哲也・宿野 隆史						
編集機関	長野市教育委員会 長野市埋蔵文化財センター						
所在地	〒381-2212 長野県長野市小島田町1414番地 TEL 026-284-0004・FAX 026-284-0106						
発行年月日	2006(平成18)年3月31日						
印刷所	株式会社ケーナール(〒381-0034 長野市高田中村337-6 TEL 026-223-4325)						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		経緯度 (日本測地系)	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号				
まつしろじょうかまちあと 松代城下町跡	ながのけんながのし 長野県長野市 まつしろまほろまつしろ 松代町松代 180番地 他	20201	F-033	北緯 36°33' 32" 東経 138°12' 14"	20046010 ～ 20040908	2,200㎡	病院建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
松代城下町跡	集落跡	江戸時代後期	石組み池状遺構 溝状遺構 礎石建物跡	陶磁器、 土器・土製品 木製品(下駄、漆器 碗・蓋、漆器櫃、桶、 箸、曲物など)	武家屋敷の建物 礎石		
		江戸時代末期 ～ 明治時代前期	池状遺構 石列 溝状遺構 埋 桶	金属製品(釘、鎌、包 丁、槍身、煙管、鈴、 銅製碗など)			
		明治時代前期～ 昭和初期	石組み池状遺構 石組み溝	石製品(硯、砥石、碁 石、石臼など) ガラス製品(徳利、筭、 薬瓶、日薬瓶、注射 液のアンブルなど)			
要 約	調査地は、松代城下町の中央部に位置し、上級武士の屋敷地にあたる。調査では、江戸時代後期から明治にかけての建物跡や石組みの池状遺構、溝状遺構などを確認した。						

長野市の埋蔵文化財 発掘調査報告書一覧

1968年	第1集 『信濃長原古墳群』	第66集 『石川集里遺跡(8)』	
1976年	第2集 『浅川西土』	1969年	第67集 『浅川扇状地遺跡群 本村東沖遺跡Ⅱ』
1978年	第3集 『中村遺跡』	第68集 『栗田城跡(3)』	
	第4集 『塩崎遺跡群』	第69集 『浅川扇状地遺跡群 徳田本堂遺跡』	
1979年	第5集 『塩崎遺跡群(2)』	第70集 『八幡田沖遺跡』	
1980年	第6集 『三輪遺跡・付内内堂一元神社遺跡』	第71集 『浅川扇状地遺跡群 ニツ宮遺跡(2)・吉田町東遺跡』	
	第7集 『田中沖遺跡』	第72集 『塩崎遺跡群(8)・石川集里遺跡(9)』	
	第8集 『藤ノ井遺跡群』	第73集 『松代城跡』	
	第9集 『四ツ屋遺跡(第1〜3次)・徳田遺跡・塩崎遺跡群(3)』	第74集 『松代城跡Ⅱ』	
1981年	第10集 『湯谷古墳群・長礼山古墳群・駒沢新町遺跡』	1990年	第75集 『浅川扇状地遺跡群 吉田四ツ屋遺跡・三輪遺跡(6)・高河原遺跡』
	第11集 『箱清水遺跡・大峰遺跡・大清水遺跡』	第76集 『浅川扇状地遺跡群 駒沢城跡・小島柳原遺跡群 中保遺跡Ⅱ』	
1982年	第12集 『浅川扇状地遺跡群-半礼バイパスA、E地点』	第77集 『浅川扇状地遺跡群 松ノ木田遺跡』	
1983年	第13集 『浅川扇状地遺跡群湯田遺跡・川田集里の遺構・石川集里の遺構』	第78集 『無鑑塚1号古墳・2号古墳』	
1984年	第14集 『石川集里の遺構(2)・上駒沢遺跡』	第79集 『松尾南遺跡』	
	第15集 『箱清水遺跡(2)』	1997年	第80集 『小島・柳原遺跡群 水内堂一元神社遺跡Ⅱ』
1985年	第16集 『石川集里の遺構(3)・(付上駒沢遺跡)』	第81集 『松花川扇状地遺跡群 村南遺跡』	
1986年	第17集 『浅川扇状地遺跡群-半礼バイパスB、C、D地点』	第82集 『浅川扇状地遺跡群 松ノ木田遺跡Ⅱ』	
	第18集 『塩崎遺跡群IV 市道松第一小田井神社地点遺跡』	第83集 『下栗ヶ谷遺跡』	
1987年	第19集 『土口町集里古墳-重要遺跡確認緊急調査』	第84集 『浅川扇状地遺跡群 吉田古原城遺跡』	
	第20集 『三輪遺跡(2)』	第85集 『上九反遺跡』	
	第21集 『丹田小学校遺跡』	第86集 『松花川扇状地遺跡群 寺村遺跡』	
	第22集 『長野吉田高校グラウンド遺跡』	第87集 『長野遺跡群 西町遺跡』	
1988年	第23集 『横田遺跡群 基土宮遺跡』	第88集 『小島柳原遺跡群 水内堂一元神社遺跡Ⅲ』	
	第24集 『塩崎遺跡群V 横屋敷遺跡』	第89集 『松花川扇状地遺跡群 尾島城跡』	
	第25集 『小島柳原遺跡群 南川向遺跡』	第90集 『西前山古墳』	
	第26集 『東森場遺跡』	第91集 『松花川扇状地遺跡群 西方遺跡・中沢城跡Ⅱ』	
	第27集 『小見見城跡』	第92集 『松原遺跡V』	
	第28集 『宮崎遺跡』	第93集 『高河原遺跡(2)・田中沖遺跡Ⅲ』	
	第29集 『浅川扇状地遺跡群 浅川端遺跡』	第94集 『浅川扇状地遺跡群 小坂原遺跡』	
	第30集 『地所山古墳群』	1999年	第95集 『跡内遺跡群 高野遺跡』
	第31集 『町川田遺跡』	2000年	第96集 『南宮遺跡Ⅱ(第1分室)・遺構編』
1989年	第32集 『中森遺跡』	2001年	第97集 『南宮遺跡Ⅱ(第2分室)・遺構編』
	第33集 『越前遺跡』	第98集 『長野吉田高校グラウンド遺跡Ⅱ』	
	第34集 『石川集里遺跡(4)』	第99集 『川田比呂跡・岩崎遺跡Ⅱ』	
	第35集 『藤ノ井遺跡群Ⅱ』	第99集 『浅川扇状地遺跡群 徳田横田遺跡』	
1990年	第36集 『鹽田遺跡Ⅱ』	2002年	第96集 『南宮遺跡Ⅱ(第3分室)・写真編』
	第37集 『藤ノ井遺跡群Ⅲ』	第100集 『四ツ屋遺跡Ⅱ』	
1991年	第38集 『栗田城跡・下平木遺跡・三輪遺跡(3)』	第101集 『藤ノ井遺跡群(5)』	
	第39集 『塩崎遺跡群(6)・石川集里遺跡(5)』	2003年	第102集 『浅川端遺跡(2)・湯田遺跡 三合塚西古墳・石川集里遺跡(10)』
	第40集 『松原遺跡』	2004年	第103集 『藤ノ井南条遺跡・浅川扇状地遺跡群民住馬遺跡・浅川扇状地遺跡群 本郡府遺跡』
	第41集 『小島柳原遺跡群 中保遺跡・浅川扇状地遺跡群 押鎌遺跡・横田遺跡』	第104集 『浅川扇状地遺跡群 天沖木遺跡・桶沢遺跡・榎見堂遺跡』	
1992年	第42集 『田中沖遺跡Ⅲ』	第105集 『浅川扇状地遺跡群 横田遺跡(2)』	
	第43集 『南宮遺跡』	2005年	第106集 『跡内遺跡群 南条遺跡』
	第44集 『塩崎遺跡群(7)』	第107集 『松花川扇状地遺跡群 西方遺跡(2)』	
	第45集 『石川集里遺跡(6)』	第108集 『浅川扇状地遺跡群 柳原宮西遺跡・榎見堂遺跡・吉田古原城遺跡・北日遺跡』	
	第46集 『藤ノ井遺跡群(4)』	第109集 『松代城下町跡』	
	第47集 『浅川扇状地遺跡群 ニツ宮遺跡・本郷遺跡・柳田遺跡・桶沢遺跡(2分冊)』	第110集 『松代城下町跡(2)』	
	第48集 『小島柳原遺跡群 中保遺跡Ⅲ』	第111集 『石川集里遺跡(11)・浅川扇状地遺跡群 本村東沖遺跡(3)・浅川扇状地遺跡群 上長田遺跡』	
	第49集 『浅川扇状地遺跡群 中保遺跡(4)』	2006年	第112集 『浅川扇状地遺跡群 吉田町東遺跡(2)』
	第50集 『浅川扇状地遺跡群 本村東沖遺跡』	第113集 『小島・柳原遺跡群 水内堂一元神社遺跡(4)』	
	第51集 『松原遺跡Ⅱ』		
	第52集 『田代宮原遺跡』		
	第53集 『岩崎遺跡』		
	第54集 『古町遺跡(個人蔵)』		
	第55集 『浅川扇状地遺跡群 駒沢新町遺跡Ⅱ』		
	第56集 『上見林遺跡』		
	第57集 『石川集里遺跡(7)』		
	第58集 『松原遺跡Ⅲ』		
	第59集 『史跡松代藩主真田家墓所』		
1994年	第60集 『埴平遺跡・宮ノ下遺跡』		
	第61集 『栗田城跡(2)』		
	第62集 『浅川扇状地遺跡群 三輪遺跡(5)・小島柳原遺跡群 上中島遺跡』		
	第63集 『松原遺跡Ⅳ』		
	第64集 『小島柳原遺跡群 宮西遺跡』		
	第65集 『浅川扇状地遺跡群 半礼バイパスB地点遺跡(2)』		

長野市の埋蔵文化財第114集

松代城下町跡(3) ～殿町～

平成18年3月24日 印刷

平成18年3月30日 発行

発行 長野市教育委員会
編集 文化財埋蔵文化財センター
印刷 株式会社ケーナール